

ごあいさつ

2006年に開館した西南学院大学博物館は、西南学院の建学の精神であるキリスト教主義を活動方針に据え、キリスト教文化に関する資料の収集と並び、キリスト教の歴史や文化に関する展覧会を実施してきました。

今回の展覧会は、「宗教改革」と「印刷革命」の二つを柱に据えています。宗教改革は、1517年にマルティン・ルターが『九十五カ条の論題』を著したことに端を発する、西欧キリスト教における宗教刷新運動のことを指します。この刷新運動によって、今日「プロテスタント」と呼ばれる新たな教派が誕生し、一昨年には500周年を迎えました。一方で、印刷革命は、15世紀半ばにヨハネス・グーテンベルクが活版印刷術を発明・実用化したことで、従来の写本から印刷本へと書物の形態が移行し、複製技術によるメディアの普及に伴って西欧文化の諸相が劇的に変化した現象のことを指します。これら二つの革新は、共に、ヨーロッパにおける中世から近代への移行を担った重要な転換点として、歴史的に位置づけられています。

宗教改革と印刷革命という二つの事象を繋ぐものは、時代の近しさだけではありません。これら二つの革新は、キリスト教の聖典である「聖書」を変えた革新でもあります。本展覧会は、これら二つの革新によって聖書がどのように変わっていったのかを、具体的なモノを通じて知っていただくことを目的としています。

本展覧会開催にあたり、さまざまなご協力を賜りました関係各位に対し衷心より御礼申し上げます。

2019年1月15日

西南学院大学博物館

館長

後藤新治

開催概要

宗教改革は、1517年10月31日にドイツの修道士・聖書教授であったマルティン・ルターが『九十五カ条の論題』をヴィッテンベルク城教会の扉に貼り出したのがその発端だと言い伝えられています。このセンセーショナルな逸話は、歴史的に実証されているわけではありませんが、この年にルターが同論題を著して、それが活版印刷によって瞬く間に西欧各地に広まってゆき、改革運動の火種となったことは確かな事実です。したがって、1517年はまぎれもなく宗教改革の始まりの年であったと言えるでしょう。

「聖書を読むこと」を信仰の核に据えた宗教改革者たちの運動は、俗語聖書の普及というかたちで、聖書の歴史に大きな足跡を刻んでいます。この「聖書」にまつわる改革運動の表の主役がルターやツヴィングリ、ティンダルといった聖書翻訳者たちであるとするれば、彼らの活動を文化的に支えた裏の主役たちも数多く存在します。その代表は、宗教改革に先立つ世紀、活版印刷術の発明によって「印刷革命」を起こし、さまざまな書物の印刷を可能にしたヨハネス・グーテンベルクです。

本展覧会では、宗教改革と印刷革命いう二つの革新が「聖書のすがた」をどのように変えたのかを、さまざまな資料と共に紹介します。

会期 2019年1月15日(火)～2019年3月23日(土)

会場 西南学院大学博物館1階特別展示室、2階講堂

主催 西南学院大学博物館

目 次

ごあいさつ	
開催概要	1
目次・凡例・謝辞	2
第1章 古代・中世の聖書写本	3
【コラム】書物としての聖書 西南学院大学博物館学芸員 下園 知弥	8
第2章 印刷革命	9
【コラム】インキュナブラの二大活字 ―Gothic and Roman― 西南学院大学博物館学芸員 山尾 彩香	14
第3章 宗教改革と活版印刷聖書	15
【コラム】宗教改革と賛美歌 西南学院大学博物館学芸員 西山 萌	22
補遺Ⅰ 宗教改革 500 周年記念	23
補遺Ⅱ 西南学院と宗教改革 500 周年記念	24
論考	
中世を継承した宗教改革―聖書史の考察に即して― 西南学院大学博物館学芸員 下園 知弥	25
カトリック改革―聖像画をめぐる教令を中心として― 西南学院大学博物館学芸員 宮川 由衣	28
出品目録	31
主要参考文献	32

凡 例

- ◎本図録は2018年度西南学院大学博物館企画展Ⅱ「宗教改革と印刷革命」[会期：2019年1月15日(火)～3月23日(土)]開催にあたり、作成したものである。
- ◎図版番号は出品目録番号に対応するが展示順番とは必ずしも一致しない。
- ◎資料データは、資料名(日本語・英語)のほか、[制作年/制作地(出版社)/素材・制作技法/所蔵]を記載している。ただし、西南学院大学博物館の所蔵資料のみ所蔵表記を割愛している。また、原資料が存在する複製品の場合は、原資料のデータを[制作年/制作地/素材・制作技法/所蔵]の順に記載している。分量に関しては巻末の出品目録に記載した。
- ◎聖書の翻訳箇所は基本的に新共同訳を用いたが、資料のテキストに基づき私訳にしている箇所もある。
- ◎本図録に掲載している写真は各所蔵先の許可なく転載・複製することは認めない。
- ◎本図録の編集は下園知弥(本学博物館学芸員)、宮川由衣(本学博物館学芸員)、山尾彩香(本学博物館学芸員)がおこなった。資料解説は下園知弥(同上)、宮川由衣(同上)、山尾彩香(同上)、西山萌(本学博物館学芸員・本学大学院国際文化研究科博士前期課程)がおこなった。編集補助には西山萌(同上)、中禮尚史(本学博物館学芸員)、鬼束芽依(本学博物館学芸員・本学国際文化学部生)があたった。

謝 辞

2018年度西南学院大学博物館企画展Ⅱ「宗教改革と印刷革命」の開催および本図録の刊行にあたって、西南学院大学国際文化学部教授中島和男先生には、企画に係るご協力、ご助言をはじめ、蔵書の出品など多大なるご協力を賜りました。また、印刷博物館、西南学院キリスト教活動支援課におかれましては、本展覧会のためにさまざまな画像・写真を提供いただきました。本展覧会の企画にご協力を賜りました関係各位に衷心より御礼申し上げます。

I

古代・中世の聖書写本

印刷技術が発明される以前の古代・中世において、聖書は写本（羅：manuscriptum）という形式で制作されていた。写本とは、「手（manus）で記されたもの（scriptum）」を意味し、修道院や書籍商の写字生によって手書きで記された本のことを指す。聖書のような権威ある写本の中には、数百枚に及ぶ——時には千枚を超える——羊皮紙へ緻密にテキストが書き込まれた大型本や、豪華な装飾や壮麗な彩色が施された装飾写本が存在する。これらの聖書写本は、紙面に記された聖句のみならず、モノとしての美しさ・存在感を通じて、人々へ信仰を伝えてきた。



1.

リンディスファーン福音書（複製）

Lindisfarne Gospels (Facsimile)

2002年 / Facsimile Verlag / 紙、宝石・貴金属（レプリカ）

原資料

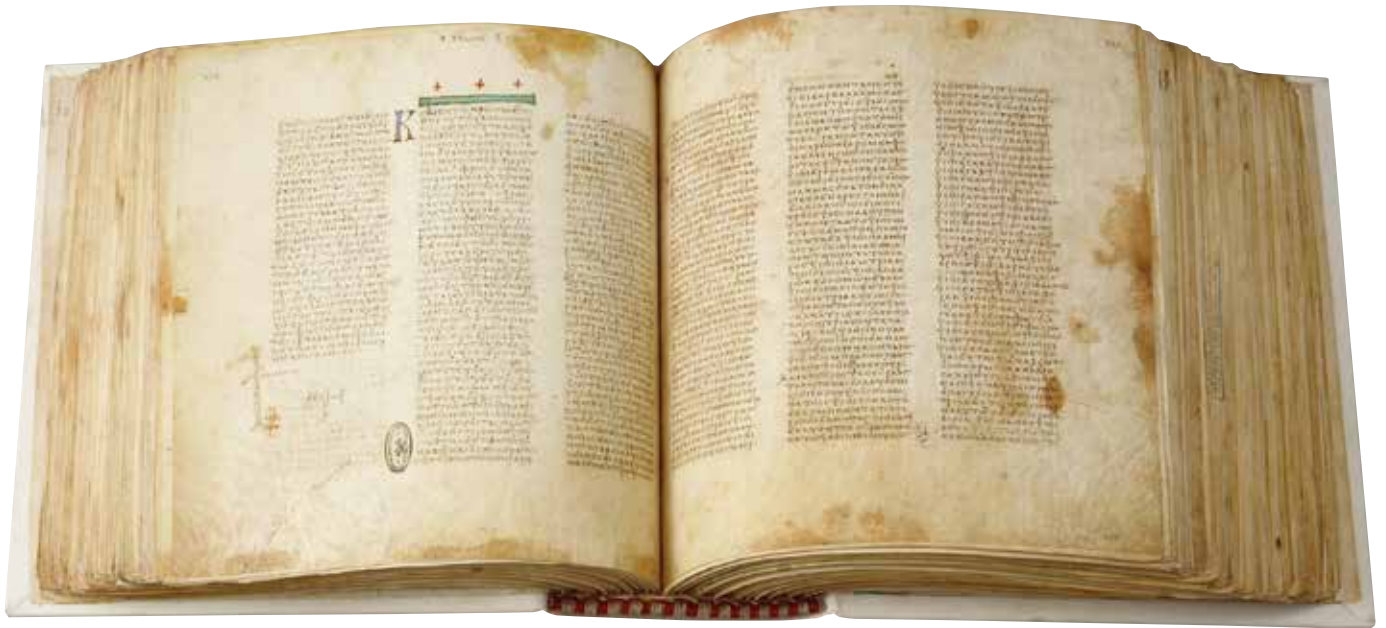
710年頃 / イギリス / 羊皮紙、手彩色、宝石・貴金属 / 大英図書館蔵

イングランド北東部のリンディスファーン修道院で制作された、初期中世を代表するインスラー装飾写本の一つ。インスラー（insula）とは、ラテン語で「島」を意味し、大陸に対する島嶼部（イングランドやアイルランド）を指す。これらの地域は初期中世における代表的な写本制作地の一つであった。

本資料の装丁は、元来、宝石や貴金属を散りばめた美しい装飾が施されていたが、オリジナルの装丁は歴史の過程で散逸してしまっている。現在の装丁は、1852年にグラム司教のエドワード・モルトビーが制作させたものである。内部の羊皮紙は元のすがたが保たれており、手彩色によって非常に美しい装飾が施されている。

中世には、本資料のように、物質的な「美」を通じて聖書の権威を表現する装飾写本が数多く製作されていた。（下図）





1 葉目の部分拡大図

写本にはバチカン教皇庁図書館の蔵書印が刻印されている。刻印の縁にはラテン語で“BIBLIOTHECA APOSTOLICA VATICANA”（ヴァチカン教皇庁図書館）と記されている。

2.

ヴァチカン写本（複製）

Codex Vaticanus (Facsimile)

1999年 / Istituto Poligrafico e Zecca dello Stato / 紙

原資料

4世紀 / 制作地不詳（エジプト?） / 羊皮紙 /

ヴァチカン教皇庁図書館蔵

旧約聖書と新約聖書のほぼ全巻を含む最古のギリシア語写本。このような、すべての巻を含む冊子本のことをパンデクト（pandect, 「総覧」という意味）と呼ぶ。パンデクトの聖書写本は、制作するためには大量の資材（羊皮紙など）と労力・技量が必要とされ、しかも必然的に大型本となる。そのため、古代・中世ではパンデクト聖書のみが普及していたわけではなく、むしろ『リンディスファーン福音書』のように、特定の箇所のみを収録した聖書が数多く制作されていた。本資料の「ヴァチカン写本」という名称は、15世紀以来、ヴァチカン教皇庁図書館がこの写本の所蔵館であることに由来する。（下図）



3.

アレppo写本（複製）

Aleppo Codex (Facsimile)

1975年 / Eisenbrauns / 紙 / 西南学院大学図書館蔵

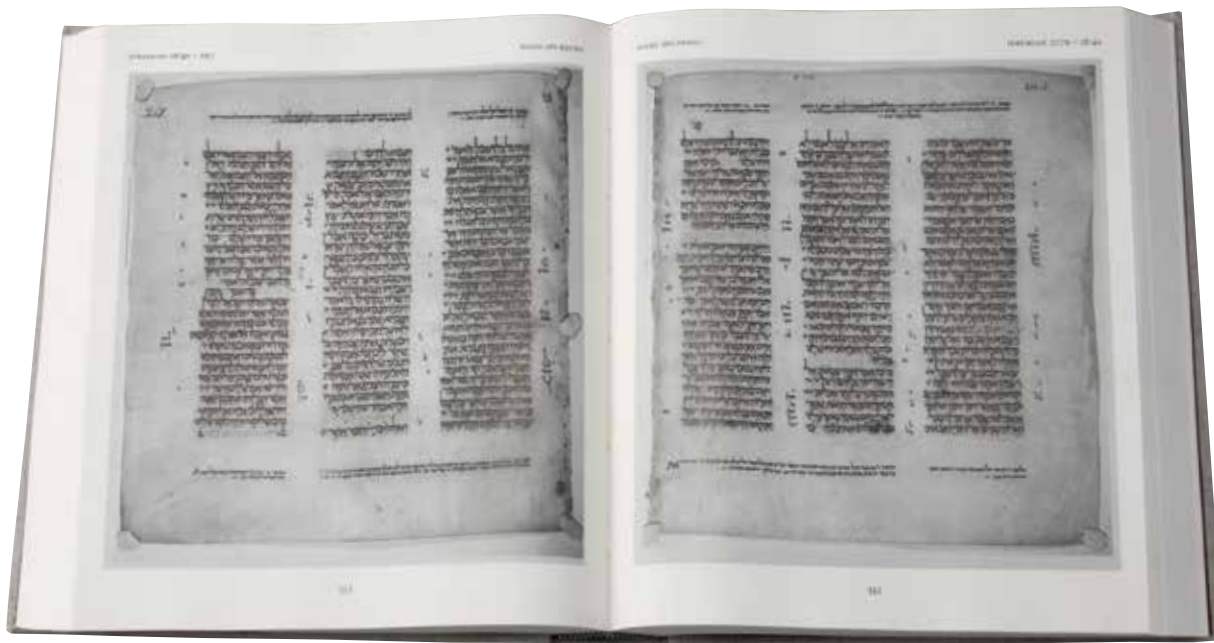
原資料 930年頃 / ティベリア / 羊皮紙 / イスラエル博物館蔵

ヘブライ語聖書（旧約聖書）のすべての巻を含んでいたとされる最古のパンデクト写本。現在はテキストの多くが失われている。ベン・アシェル家のマソラ学者たちの手による写本であり、マソラ本文が記されている。「アレppo写本」という名称は、1957年までシリアのアレppoに在するシナゴグ（ユダヤ教の会堂）が所有していたことに由来しており、現在はエルサレムのイスラエル博物館で保管されている。2015年、本資料（原資料）はユネスコより世界記憶遺産に認定された。（下図）

マソラ本文の伝統

マソラとは、「伝承」と訳されるヘブライ語であり、ユダヤ教において伝統的に継承されてきたヘブライ語聖書の解釈、およびそのテキストのことを指す。マソラに基づく正統的な聖書本文は「マソラ本文」、マソラに携わる聖書学者たちは「マソラ学者」と呼ばれる。マソラ学者には西方学派と東方学派という二つの大きな流れがあり、本図録に掲載しているアレppo写本（資料3）やレニングラード写本（資料4）は西方学派に属する写本である。

印刷革命の後、ヘブライ語聖書も活版印刷によって印刷されている。初期の活版印刷ヘブライ語聖書として、キリスト教徒の印刷工ダニエル・ボンベルクがユダヤ教のラビに編集させて出版した『第1ラビ聖書』（1516-17）と『第2ラビ聖書』（1524-25）が挙げられる。これらの印刷本聖書のテキストもまた、写本から集められたマソラ本文であり、以降の印刷本ヘブライ語聖書においても、マソラ本文の伝統は継承されていった。



《レニングラード写本》装丁の部分拡大図

ダビデの星（六芒星）がヘブライ語の文字によって描かれている。ダビデの星は、ヘブライ語聖書（旧約聖書）のダビデ王を象徴する記号であり、ひいてはユダヤ民族の象徴でもある。現在のイスラエルの国旗にもこの象徴が用いられている。

4.

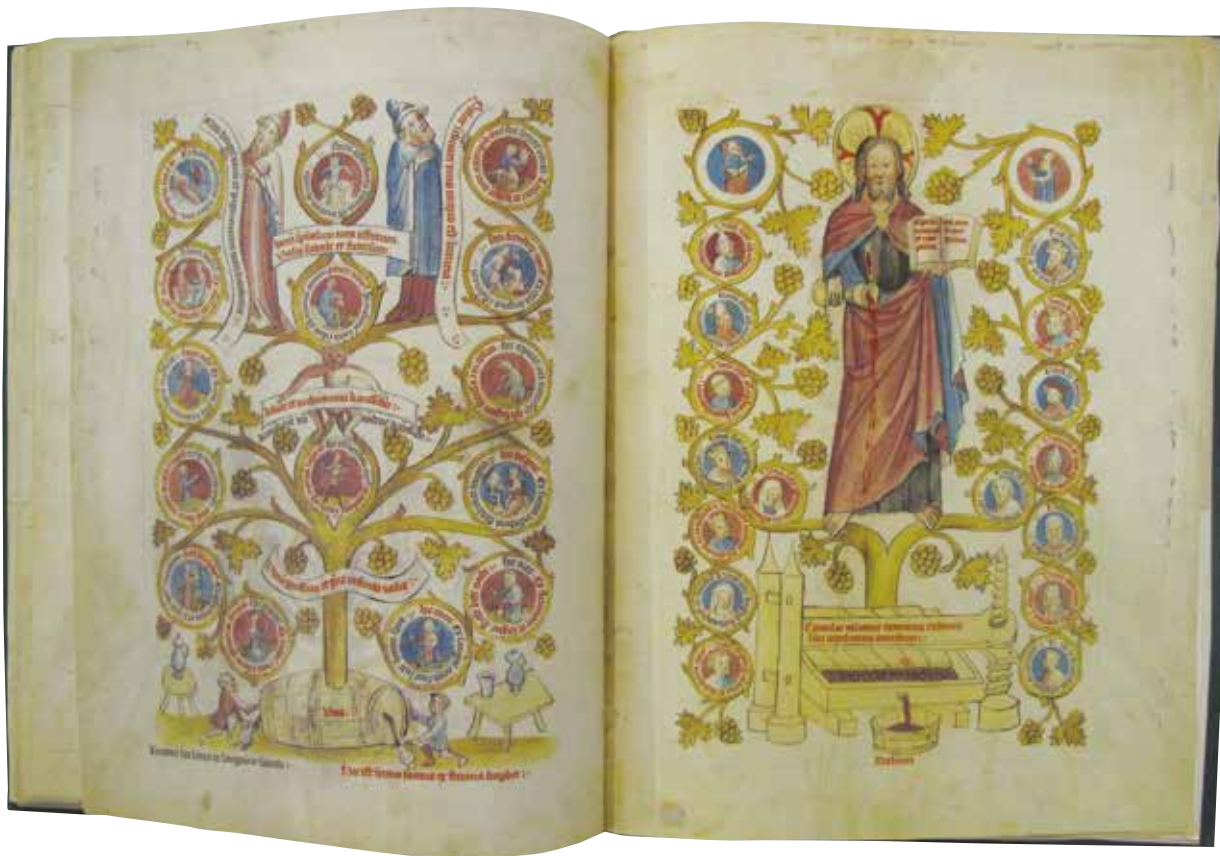
レニングラード写本（複製）

Codex Leningradus (Facsimile)
1998年 / Brill Academic Publishing / 紙 / 西南学院大学図書館蔵

原資料

1008-09年 / カイロ / 羊皮紙 / ロシア国立図書館蔵

ヘブライ語聖書（旧約聖書）のバンデクトであり、すべての巻が現存している最古の写本とされている。アレppo写本と同様、マソラ本文が記されており、ベン・アシェルの伝統に従ったテキストである。本資料は、現在普及しているヘブライ語聖書の校訂版 *Biblia Hebraica Stuttgartensia (BHS)* の底本となっており、歴史的・学術的価値が極めて高い。写本名は、サンクトペテルブルク（旧レニングラード）の国立図書館が所蔵していたことに由来する。（下図）



左頁
部分拡大図

bibite et inebriarumi karissimi
「飲め、愛する人々よ、大いに飲め」
(雅歌 5:1 に基づく)



右頁
部分拡大図

Ego su[m] vitis v[er]ja et vos palmites mei
sicut palmi[tes]
「私はぶどうの木、あなたがたは私の枝、
ぶどうの枝がそうであるように」
(ヨハネ 15:5 に基づく)

5. 貧者の聖書（複製）

Paupers' Bible (Facsimile)
1982年 / Belser Verlag / 紙 /
西南学院大学図書館蔵

原資料
制作地不詳（バンベルク?） / 1425-50年頃 /
羊皮紙、手彩色 / ヴァチカン教皇庁図書館蔵

『貧者の聖書』（羅: *Biblia Pauperum*）は、14-15世紀ごろに西欧で製作されていた聖書写本の一種である。本資料のような手彩色による写本のほか、木版画のバリエーションも知られている。その名称ゆえに誤解を招きやすいが、金銭的に貧しい人々のための「安価でシンプルな聖書」ではなく、旧約聖書と新約聖書の出来事の内容的な連関（予型論）を豊富なイラスト・解説によって示している「工夫の凝らされた教育用聖書」である。上図では、ワイン（飲酒）に関する旧約聖書と新約聖書の言葉がそれぞれ対置されている。（下図）

コラム

書物としての聖書

西南学院大学博物館学芸員 下園知弘

聖書とは何か。このように問うた場合、一つの簡潔な答えは「ユダヤ・キリスト教の聖典とされている書物」であろう。あるいは、ユダヤ・キリスト教徒自身の認識に即して、「神の言葉が記された書物」という回答もありうる。いずれにせよ、聖書が「書物」であることは、その言語表記からして明白である。西欧諸語においても、この言語的な事情は同様である。というのも、聖書を意味する西欧諸語は、ラテン語の *Biblia*——さらに遡れば、ギリシア語の *βιβλιον*——を語源としており、この語は元来「書物」を意味する言葉だからである¹。むしろ、聖書が聖書たる所以はそこに神の言葉が記されている点にこそあるが、神の言葉とその媒介たる書物の関係は不可分である。本コラムでは、古代・中世を中心として、書物としての聖書の歴史をたどることにより、近代以前の信仰者たちがどのように神の言葉を伝承してきたのかを少しく紹介したい。

書物としての聖書の最も古い形態は「巻物」(scroll)である。パピルスのシートを接着して巻物状にまとめたタイプの聖書が古代のユダヤ教徒たちによって使用されており、初期のキリスト教徒たちもこのタイプの聖書を使用していた²。たとえば、『ヘブライ信徒への手紙』10:7の記述からも、当時の聖書が巻物であったことがわかる。その後、4世紀までには、聖書の形態は羊皮紙製の冊子本(codex)に移行したと考えられる³。パピルスよりも丈夫な羊皮紙という素材で冊子にまとめられた書物は、巻物に比して耐久性や可読性に優れており、巻物よりもはるかに多くの文書を一冊に収録することができたので、中世における一般的な聖書の形態となった。

冊子本の普及に伴って実現したのが「パンデクト聖書」である。聖書のすべての巻が一冊に収録されたパンデクト聖書は、圧倒的な存在感を有しており、まさに視覚化された神の言葉の権威であると言えよう。ただし、パンデクト聖書は中世後期に至っても一般的ではなく、分冊ないし部分収録の聖書の方が多数を占めていた⁴。というのも、古代・中世において書物は手書き(写本)で長い月日をかけて制作されており、加えてパンデクト聖書を作るためには何百枚もの羊皮紙が必要だったからである。現代のように、ほぼすべての巻が所収されておりかつ小型で携帯可能な聖書が現れるようになったのは、13世紀以降のことである⁵。さらに、そのようなタイプの聖書が一般的になったのは、紙が普及し⁶、活版印刷術が発明され、安価に大量の書物を印刷することが可能となった「印刷革命」以後のことであった。

また、中世においては「装飾写本」の聖書も数多く制作された。紙面を彩る装飾のスタイルは時代や地域によって千差万別であるが、ここで注目したいのは、その美的な傾向である。中世の装飾写本聖書の中には、聖書のテキストの内容とは関係なしにひたすら美しい装飾が施された写本が数多く存在する。なぜ中世の写字生たち——その多くは修道士であった——は写本を美しく彩ろうとした

のであろうか。この問題に関しては、シュトラスブルクのウルリッヒの次の言葉が示唆的である。

神は、それ自体、完全に、その極みまで美しいばかりでなく、すべての創られた美の能動因であり、範型因であり、目的因である⁷。

ここでウルリッヒが言わんとしているのは、美そのものである神と被造的な美の関係である。すなわち、神の美が、被造的な美に対して、それを創出させ、そのモデルとなり、その目的となる、という関係である。したがって、ウルリッヒの神学に即して言えば、「神」ないし「神の美」こそが、中世の写字生たちを美的な傾向へと突き動かしていた原因なのである。つまり、信仰心が美の原動力であった、ということである。

書物の普及という点から考えれば、印刷革命以前は、聖書の所有者は著しく限定されていた。然るに、印刷革命以前は聖書の暗黒期だったのかと言えば、決してそうではないだろう。パンデクト聖書の圧倒的な存在感や装飾写本聖書の壮麗な美もまた、神のために捧げられた、信仰の熱意の結実である。聖書の歴史において、書物という媒介の有り様を一変させた印刷革命が一つの転換点になっていることは確かである。しかしながら、それ以前の時代にも、その時代の枠組みの中で、神の言葉を豊かに伝承すべく尽力した信仰者たちがいたという事実を忘れてはならないだろう。

主要参考文献

一次文献

Ulrich von Schrassburg, *De summo bono, Liber 2, Tractatus 1-4*, Alain de Libera hrsg., Hamburg, Felix Meiner Verlag, 1987. (シュトラスブルクのウルリッヒ「美・光・愛について」熊田陽一郎訳、『キリスト教神秘主義著作集3 サン・ヴィクトール学派とその周辺』所収、教文館、2000年)

二次文献

Christopher de Hamel, *The Book: A History of the Bible*, London, Phaidon, 2001.

Frans van Liere, *An Introduction to the Medieval Bible*, Cambridge University Press, 2014.

1 ラテン語の *scriptura* も聖書を表す用語として一般的である。*scriptura* は「書かれたもの」という意味なので、*scriptura* という用語もまた、書物という形態と密接に関連していると言えるだろう。

2 Liere, *An Introduction to the Medieval Bible*, p. 21.

3 *Ibid.*, p. 22.

4 Liere, *op.cit.*, p. 23.

5 De Hamel, *The Book: A History of the Bible*, pp. 114-139.

6 西欧における紙の伝来は、12世紀ごろ、アラビアとの接触がきっかけであった。14世紀までには西欧でも紙が一般に普及していたと考えられる。Cf. Liere, *op.cit.*, p. 24.

7 "Deus non solum pulcher est perfecte in se in fine pulchritudinis, sed insuper est causa efficiens et exemplaris et finalis omnis creatae pulchritudinis." (*De summo bono*, lib. 2, tr. 3, cap. 4, 3.)

Lucez fuisse qui euangelia scripsit. Quoniam quidem multa namque in nobis complecti non ipse uiderit. fermones & in praedictis tempore monumenta sedita dixerant heresim fore thomane & matthian & bartholomae & basilidis atq; apellus giffimum eibcum tantum in p... sende quosdam qui sine ip... ostinare narrationem quam... nare possit illud prophetau... fono qui ambulat post forum... minus non mittit eos. De q...



II

印刷革命

1440年頃、マインツの金属細工職人ヨハネス・グーテンベルク(1398頃-1468)が金属活字による活版印刷術を実用化すると、ヨーロッパは印刷文化の時代を迎えた。統一規格による本の複製・大量生産を可能とする印刷文化が到来したことで、ヨーロッパの文化は大きな変容を被った。この西洋文化の革新的な変容を歴史学者アイゼンsteinは「印刷革命」(The Printing Revolution)と呼んだ。印刷革命以後、ヨーロッパではさまざまな書物が印刷・出版され、世界中に拡散していった。初期印刷本の一部は現存しており、活字と手彩色が混在する初期の印刷文化の姿を現代に伝えている。



6. **42行聖書(複製)**
42-line Bible (Facsimile)
1978年 / Idion Verlag / 紙
原資料 1455年頃 / マインツ / 羊皮紙、活版、手彩色 / 国立プロイセン財団図書館およびフルダ州立図書館蔵

グーテンベルクが発明した活版印刷機により出版された西洋初の印刷聖書。ほとんどのページが42行で構成されていることから『42行聖書』もしくは印刷者の名から『グーテンベルク聖書』と称される。本文はラテン語聖書(ウルガタ)で、ゴシック体活字で印字されている。印刷は本文のみで、見出しの朱文字が手書きでいれられたのち、購入先で彩色文字や装飾文様が施された。上下巻構成で推定180部(羊皮紙製45部、紙製135部)の初版が印刷され、完本で現存するのは48部である。グーテンベルク聖書以降の15世紀後半は活版印刷の揺籃期にあたり、この時期の印刷物はインクynaブラと呼称される。本資料は世界各地で所蔵されている原資料をもとに作成された復刻版のひとつ。装飾はドイツのライプツィヒで施されたもので、16世紀の革の装丁を再現している。(山尾)

活版印刷とグーテンベルク

活版印刷 (Letterpress Printing) とは、複数の活字を組み合わせることで文章を印刷する技術のことである。歴史上この技術が最初に発明されたのは中国においてであり、11世紀の宋代には、膠泥製の活字の使用例が確認されている。西洋においては、ヨハネス・グーテンベルクが15世紀半ば(1440年頃)に金属活字を用いた活版印刷術を発明・実用化したことが活版印刷の始まりとされている。なお、グーテンベルク時代の活版印刷機は、「木製手引き印刷機」と呼ばれるタイプの、人力による印刷機であった(図1)。

活版印刷のプロセス イラスト: 鬼束芽依

1. 活字製作

金属活字の鋳造。まず、凸状に文字が彫られた鉄製の父型を柔らかい金属に打ち込み、母型を製作する。母型の凹みに溶かした金属を流し込み、冷ますと、活字が鋳造される。



2. 文選

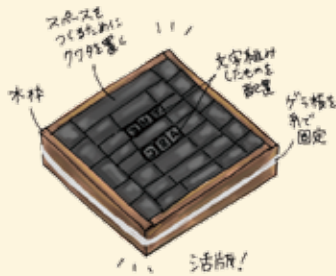
活字の収集による文章作成。印刷する文章のテキストに沿って、ステッキやゲラ版といった専用の道具を使い、適切な規格の活字を集めていく。



図1 木製手引き印刷機
画像提供: 印刷博物館

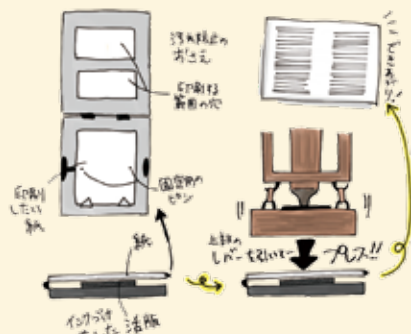
3. 組版

活字の整形。整形にはクワタと呼ばれる空白(スペース)をつくるための用具が用いられる。整形が完了したら、結束糸で固定し、印刷機にセットする。



4. 印刷

印刷機のプレスによる複写。印刷機にセットされた活版は、インクが塗られ、紙にプレスされる。



ヨハネス・グーテンベルク (Johannes Gutenberg, 1396 頃 - 1468 年)

ドイツ西部の都市マインツの上流階級の商人の家に生まれる。飾り職人ギルドに入り、金属細工に長じる。1434年頃、シユトラスブルクに移り、滞在中すでに活版印刷の開発を試みていたと考えられている。44-45年にマインツに戻り、50年頃にはヨハン・フストの資金で印刷所を設ける。52年頃から『42行聖書』の制作を開始し、55年頃にこの活版印刷聖書を完成させた。

左図 《グーテンベルク記念メダル》 1889年頃、メロポリタン美術館蔵
Johannes Gutenberg: Commemorative of the Erection in New York by Robert Hoe of a statue of Gutenberg in 1889.

挿絵解説

ダンテ (D) とウエルギリウス (V) が煉獄を巡るなかで出会う人物などが描かれている。

挿絵の登場人物に関する本文「見るにトムロデが〔バベルの〕塔の下でなかば茫然として、シナルの地に集まった。自分に劣らず高慢ちきな子どもを眺めていた。

おオオオべよ、殺された7人の息子と7人の娘の間で、見た目にもいたましい姿で、おまへは道の上の石像と化していた。

おオサウルよ、おまへは自分の剣の上に身を投げてジルボアで死んだその時のままの姿で写されていた、あの地には以後雨も降らず露も置かぬという。」

(本文 37 行 - 42 行)

翻訳典拠：平川祐弘訳『神曲』

河出書房新書、1992 年



7.

ダンテ『神曲』煉獄篇

Dante's Devine Comedy(Purgatory)

1491 年/ヴェネツィア/紙、活版・木版

ダンテ・アリギエーリ (1265-1321) が著した長編叙事詩『神曲』の煉獄篇第 12 歌の一葉。本文はイタリア語 (トスカーナ方言) で、総序 1 歌を含む地獄篇 34 歌、煉獄篇 33 歌、天国篇 33 歌の計 100 歌で構成されている。主人公であるダンテが古代ローマの詩人ウエルギリウスの案内で、地獄、煉獄、天国をめぐる内容となっている。

本資料はビエトロ・デ・ピアージの印刷によるインキュナブラで、ヴェネツィアで出版されたもの。本文はローマン体活字。木版の挿絵にはダンテが煉獄をめぐる中で出会う人物たちが描かれている。本文と挿絵のほかに、クリストフォロ・ランディーノによる注釈が添えられている。(山尾)



挿絵拡大図

一見すると単なる書記者の仕事場の図像だが、注視すると、本文の単語の頭文字「P」を装飾したものであることがわかる。この種の装飾は「イニシャル」(initial)と呼ばれる中世の写本に典型的な表現技法であり、同技法が活版印刷初期の時代にも継承されていたことがわかる。

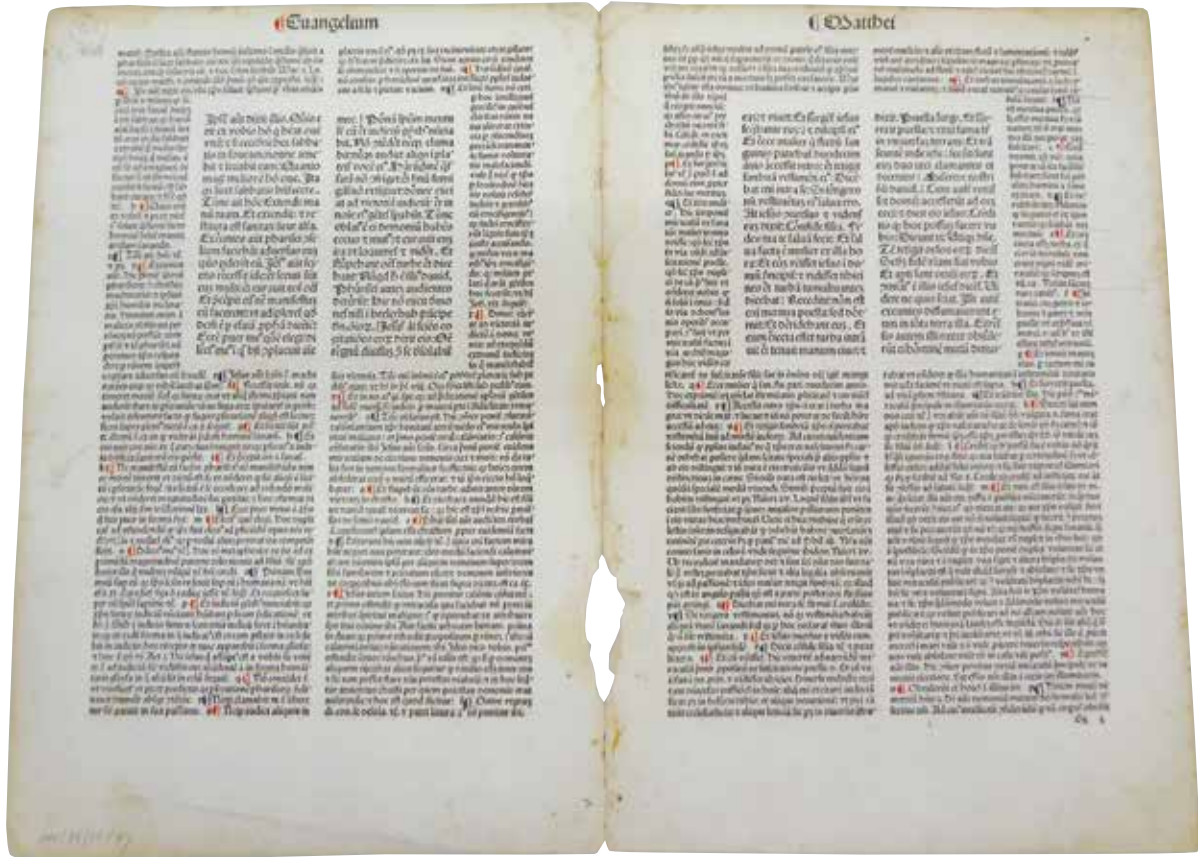
本図像の人物については二つの可能性が考えられる。一つは本資料の著者聖ヒエロニムスであり、いま一つは聖人伝集『黄金伝説』を著したヤコブス・デ・ヴォラギネである。人物の着座している椅子に“DEVORAGINE”(デ・ヴォラギネ)と記されていることから、ヤコブス・デ・ヴォラギネである可能性が高い。

8.

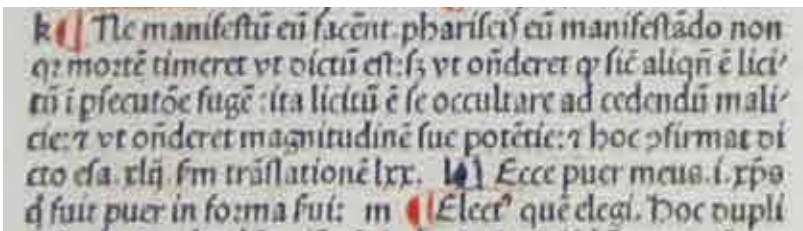
聖ヒエロニムス『マタイ福音書註解』

Saint Jerome's Commentary on Matthew
1498年/ヴェネツィア/紙、活版・木版

本資料は、普及版ラテン語聖書であるウルガタ聖書(Biblia Sacra Vulgata)の翻訳者として知られる聖ヒエロニムス(340頃-420)によって著された聖書註解書のインクユナブラである。本資料には「マタイ福音書」の序文から第1章(裏面に記載)までが印刷されている。見出しにはラテン語で“INCIPIT PROLOGVS SANCTI HIERONYMI PRAESBYTERI IN COMMENTVM SVPER MATHEVM AD EVSEBIVM”(エウセビウスに宛ててマタイ福音書註解における司祭聖ヒエロニムスの序文が始まる)と記されている。本資料のような聖書註解書は、キリスト教の歴史の中で数多く著されてきた。これらの聖書註解書は、聖書の言葉を理解するための重要な資料として、また尊敬すべき先人たちが尽力した聖書研究の精華として、キリスト教の諸教会において伝統的に継承され、研究されている。(下園)



テキスト部分拡大図（¶ k の箇所のみ校訂・翻訳）



¶ k. Ne manifestum eum facerent. phariseis eum manifestando non quia mortem timere ut dictum est: sed ut ostenderet quod sicut aliquando est licitum in persecutioe fugere: ita licitum est se occultare ad cedendum maliciae: et ut ostenderet magnitudinem suae potentiae: et hoc confirmat dicto esa. XLII secundum translationem LXX.

k 節

【聖句】 御自身のことを言いふらさないようにと（戒められた）。(マタイ 12:16)

【註解】 フェリサイ派の人々へ御自身のことを言いふらさないように、と主が言ったのは、前述のように、死を怖れていたからではなく、迫害から逃れることや悪徳から離れるために身を隠すということが或る場合には許される、と主の示すためであった。また、御自身の力の偉大さを示すためでもあった。『イザヤ書』第 42 章（第 1-4 節）の七十人訳（セブトゥアギンタ）で言われていることも、そのことを証している。

9.

聖句註解付きラテン語聖書

Latin Bible with Postil

1481年 / ヴェネツィア / 紙、活版、手彩色

本資料は、中世後期のフランシスコ会士リラのニコラウス（1270 頃 - 1349）によって著された聖句註解（羅：Postilla）が付記されたラテン語聖書である。中央の二段のコラムが聖句（マタイ福音書）であり、外側の二段のコラムが聖句註解となっている。Postillaとは、中世後期に数多く著されていた聖書の解説書である。リラのニコラウスは中世後期において非常に影響力の大きかった聖書学者であり、ヘブライ語の知識を有し、ラビの聖書解釈にも通じていた。彼の聖句註解は、中世後期から近代初頭にかけて写本・印刷本で広く普及し、ルターも彼の聖句註解を読んでいた。そのため、「リラ〔のニコラウス〕が堅琴（リラ）を奏でなかったら、ルターは踊らなかつたであろう」（Si Lyra non lyrasset, Lutherus non saltasset.）という格言が遺されている。（下図）



インキュナブラの二大活字 ——Gothic and Roman——

西南学院大学博物館学芸研究員 山尾彩香

インキュナブラ(incunabula)とは、グーテンベルクの『42行聖書』(『グーテンベルク聖書』)以降の印刷の揺籃期にあたる15世紀後半に制作された、金属活字による印刷物の呼称である。インキュナブラは写本の模倣から始まり、そこに用いられる活字もまた写本の文字を真似たものが制作された。とくにインキュナブラではゴシック体とローマン体が二大活字として活躍する。

伝統のゴシック体活字——Gothic——

グーテンベルクによる西洋初の印刷聖書である『42行聖書』の本文は、ゴシック体の一つであるテキストウーラ・クワドゥラータ(textura quadrata)の活字が用いられている。グーテンベルクは聖書を印刷するにあたり、当時の聖書や典礼書に用いられていたこの書体を模倣し、約300種の活字を制作し印刷したとされている。

ゴシック体は、先端が角張って尖った直線的な形が特徴で、インキュナブラの多くに用いられた。そのなかでもテキストウーラ・クワドゥラータは公文書や宗教関連の書物に使われた格式のある書体で、「織られた」というラテン語の名が表すように、縦横の織り目の等しい布のように整然としている。ダイヤモンド型のヘッドとフットをもつ、垂直に立ち上がった威厳ある姿が特徴である。

「ゴシック」という呼称はGoth(ゴート族のような、粗野な)という言葉に由来する。これはルネサンスの人文主義者たちが古代ローマの書体に比べて、中世以来伝統的に用いられてきたこの書体を貶めるための蔑称であった。

ルネサンスのローマン体活字——Roman——

15世紀、ギリシア・ローマの古代文芸を復興する文化運動であるルネサンスにおいて、古代ローマ碑文の書体をも復興しようと真似られて誕生した書体がローマン体である。端正な丸みのある軽やかな線の特徴とするこの書体の習得は、当時の上流階級にとって必須の教養でもあった。イタリア・ルネサンスの人文主義から生まれたローマン体は、ルネサンス期を代表する書体としてだけでなく活字としても大いに活躍する。

ローマやヴェネツィアの初期活版印刷所では、人文主義者をターゲットに、古典的テキストや聖ヒエロニムスといったキリスト教教父の著作をローマン体で刊行した。古典的著作の流行と相俟って、人文主義者たちに愛好されたローマン体は刊本でも重宝された。

このように同時期に制作、共存したゴシック体活字とローマン体活字は、様々な市場や顧客のニーズ、書物の内容に応じて使い分けられた。



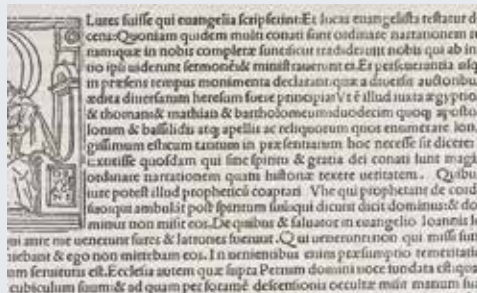
インキュナブラ
《ラテン語聖書》 ニュンベルク(ドイツ)、
1478年、西南学院大学博物館蔵



活字
(画像提供：印刷博物館)



テキストウーラ・クワドゥラータ
『42行聖書』(資料6部分)



ローマン体
《聖ヒエロニムス『マタイ福音書注解』》(資料8、部分)

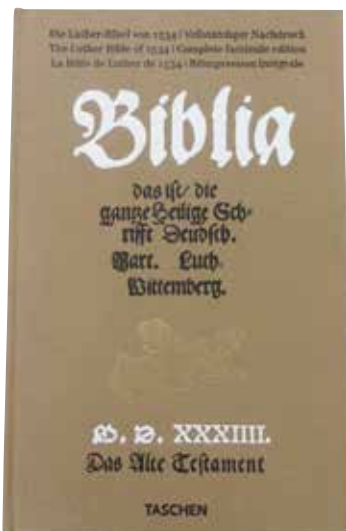
【主要参考文献】

- E・P・ゴールドジュミット 『ルネサンスの活字本——活字、挿絵、装飾についての三講演』 高橋誠訳、国文社、2007年
- アンドルー・ベティグリー 『印刷という革命——ルネサンスの本と日常生活』 桑木幸司訳、松岳社、2015年
- ベルンハルト・ビショッフ 『西洋写本学』 佐藤彰一ほか訳、岩波書店、2015年

III

宗教改革と活版印刷聖書

1517年、ヴィッテンベルク大学聖書教授のマルティン・ルター（1483-1546）が『九十五カ条の論題』を著すと、「論題」は活版印刷によって瞬く間に西欧各地に拡散していった。これが宗教改革の始まりとされている。プロテスタントの重要な信仰原理の一つは「聖書のみ」(sola scriptura)であり、ルターをはじめとする宗教改革者たちは、民衆が自ら聖書を読むことを重視した。そのため、彼らは聖書の言葉をそれぞれの地方で話されている言語（俗語）に翻訳した。さらに、彼らは俗語聖書を活版印刷によって大量に出版・普及させることによって、より多くの人々が聖書を所有できるようにした。この「俗語聖書の普及」は宗教改革の重要な意義の一つとされているが、この活動を思想的に支えたのが宗教改革であり、技術的に支えたのが活版印刷であったと言える。



旧約聖書



新約聖書

10.

ルター訳聖書（1534年版・複製）

Luther Bible (Facsimile of 1534)

2003年 / Taschen / 紙 / 個人蔵

原資料 1534年 / ヴィッテンベルク / 紙、活版・木版、手彩色

宗教改革以前の俗語聖書

俗語聖書の普及において宗教改革者たちが果たした役割は大きいですが、宗教改革以前から俗語聖書が西欧世界に存在しなかったわけではない。初期の例としては、『歴史物語聖書』や『13世紀フランス語聖書』が挙げられる。また、ルターの時代にも、『ザイナー聖書』など多くのドイツ語聖書が存在していた。しかし、これらのドイツ語聖書は翻訳が十分ではなく、民衆が正しく聖句を理解できるようなものではなかった。そのため、ルターは民衆が実際に使っている言葉を用いた新たな翻訳を企図したのであり、それが民衆に熱烈に歓迎されたのであった。



11.
ルター訳聖書 (1763 年版)
 Luther Bible (1763)
 1763 年 / ヴォルムス / 紙、活版・銅版



12.
ルター訳聖書 (1545 年版・複製)
 Luther Bible
 (Facsimile of 1545)
 1967 年 / Württembergische Bibelanstalt / 紙 / 西南学院大学図書館蔵
 原資料
 1545 年 / ヴィッテンベルク / 紙、活版・木版

ルターによるドイツ語訳聖書が初めて出版されたのは 1522 年 9 月のことである（出版月にちなんで、このルター訳聖書の初版は『9 月聖書』と呼ばれる）。1521 年、教会を破門され帝国追放の処分も受けたルターは、ザクセン選帝侯によってワルトブルク城に匿われていた。この時期にルターは新約聖書の翻訳に着手し、デジデリウス・エラスムスの校訂によるギリシア語新約聖書を用いつつ、10 週間ほどで訳稿を完成させている。この訳稿は、ヴィッテンベルク大学の同僚であったフィリップ・メランヒトンらの助言のもとに推敲が重ねられ、友人の画家ルーカス・クラナッハによる木版画の挿絵が付けられたかたちで、ヴィッテンベルクの印刷工ハンス・ルフトによって 3000 部印刷された。この新しいドイツ語新約聖書は、瞬く間に完売したと言われている。

新約聖書に続いて、ルターは旧約聖書の翻訳・出版にも着手し始めた。そして 1534 年、同じくハンス・ルフトの印刷所より、ルターはすべての巻が揃った『旧新約聖書』を出版した。挿絵は 1522 年版と同じくルーカス・クラナッハの工房が請け負っており、中世美術で発展した象徴（「ヨハネ福音書と鷲」など）を取り入れた、色鮮やかな挿絵本となっている。資料 10 は Taschen 社より出版されたこの『旧新約聖書』の復刻版である。

旧約・新約共に完成したルター訳聖書は、その後も改訂・重版を重ねてゆき、数多の印刷所から印刷されていった。1545 年版は、ルター存命時の最後の版であり、資料 12 はその復刻版である。1763 年版は、複数の業者による版が確認されているが、資料 11 はヨハン・フリードが序文や註などを記し、ダニエル・バルトロマイと彼の息子が印刷した版であることが扉の記述よりわかる。（下図）

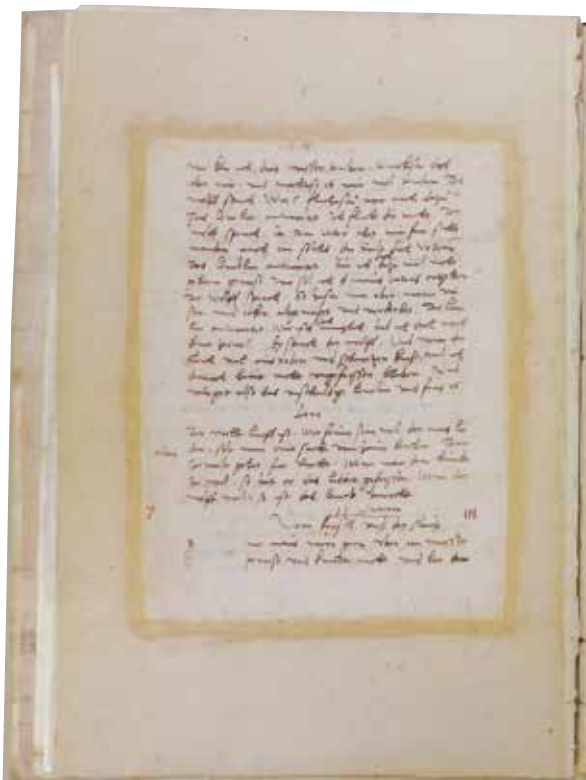


マルティン・ルターの肖像画

『ルター訳聖書』（1763年版、資料11）の部分拡大図。肖像の四隅には“Nat.1483.”（1483年生まれ）、“Denat.1540.”（1540年没）と記されている。没年のデータは誤りである。

宗教改革期の主な活版印刷聖書 年表

年	出版された聖書	使用地域 教会	言語
1522年	ルター訳聖書（新約） *旧約含む完全版が1534年に出版	ドイツ	ドイツ語
1524年	チューリッヒ聖書（新約） *旧約含む完全版が1530年に出版	スイス	ドイツ語
1524年	オランダ語新約聖書 *エラスムス版新約聖書が底本	オランダ	オランダ語
1526年	ティンダル訳聖書（新約） *旧約のモーセ五書が1530年に出版	イギリス	英語
1526年	オランダ語聖書 *ルター訳聖書が底本	オランダ	オランダ語
1526年	スウェーデン語新約聖書 *旧約含む完全版が1541年に出版	スウェーデン	スウェーデン語
1530年	ブルジョア訳新約聖書 *旧約含む完全版が1532年に出版	イタリア	イタリア語
1535年	カヴァーデイル聖書	イギリス	英語
1535年	オリヴェタン聖書	フランス	フランス語
1537年	マシュー訳聖書	イギリス	英語
1539年	大聖書	イギリス	英語
1541年	フィンランド語新約聖書 *ミカエル・アグリコラ訳 *旧約含む完全版が1642年に出版	フィンランド	フィンランド語
1543年	エンシナス訳新約聖書 *旧約の一部が1550年に出版	スペイン	スペイン語
1550年	ルーヴァン聖書	カトリック	フランス語
1557年	ジュネーブ聖書（新約） *旧約含む完全版が1560年に出版	イギリス	英語
1568年	司教聖書	イギリス	英語
1582年	ランス＝ドゥエ聖書 *新約は1582年、旧約は1609-10年にそれぞれ出版	カトリック	英語
1584年	アイスランド語聖書 *グドブランドル・ソルラクスソン訳	アイスランド	アイスランド語
1592年	シクスト・クレメンティーナ版ウルガタ *シクスト版ウルガタの改訂版	カトリック	ラテン語
1604年	ピスコートル訳聖書	ドイツ	ドイツ語
1607年	ディオダーティ訳聖書	イタリア	イタリア語
1611年	欽定訳聖書	イギリス	英語
1637年	国定訳聖書	オランダ	オランダ語



13.

ルターによる書簡とイソップ寓話（複製）

Martin Luther: Letters and Aesop-Fable (Facsimile)

1983年 / Belser Verlag / 紙 / 個人蔵

原資料

1516-32年 / 紙、直筆 / ヴァチカン教皇庁図書館蔵

本資料は、ルターの自筆による書簡とイソップ寓話である。書簡は1516年から1532年までの友人や家族宛てのものであり、イソップ寓話は、ルターが1530年のコーブルク滞在中に著した翻案である（出版は死後の1557年）。ルターは教育的な観点からイソップ寓話に着目しており、『キリスト者の自由』などの著作にもこの寓話が用いられている。本資料は、ルターの筆跡のみならず、彼の人文学的な関心を実証する資料の一つである。（下園）



14.

チューリッヒ聖書

Zurich Bible

1531年 / チューリッヒ / 紙、活版

チューリッヒ聖書とは、1524年以降、フルドリヒ・ツヴィングリ（1484-1531）をはじめとするチューリッヒ宗教改革者らの訳業によって出版された一連のスイス方言ドイツ語聖書である。1530年には、ルター訳聖書の完訳に先駆けて、すべての巻を収めた完全版のチューリッヒ聖書が出版された。この版を手がけたのはフローシャウアーという名の印刷工である。本資料もフローシャウアーが手がけた版の一つであり、1531年に出版されたフォリオ版（二つ折り版）の断片だと考えられる。（下園）



15.

ティンダル訳聖書（複製）

Tyndale Bible (Facsimile)

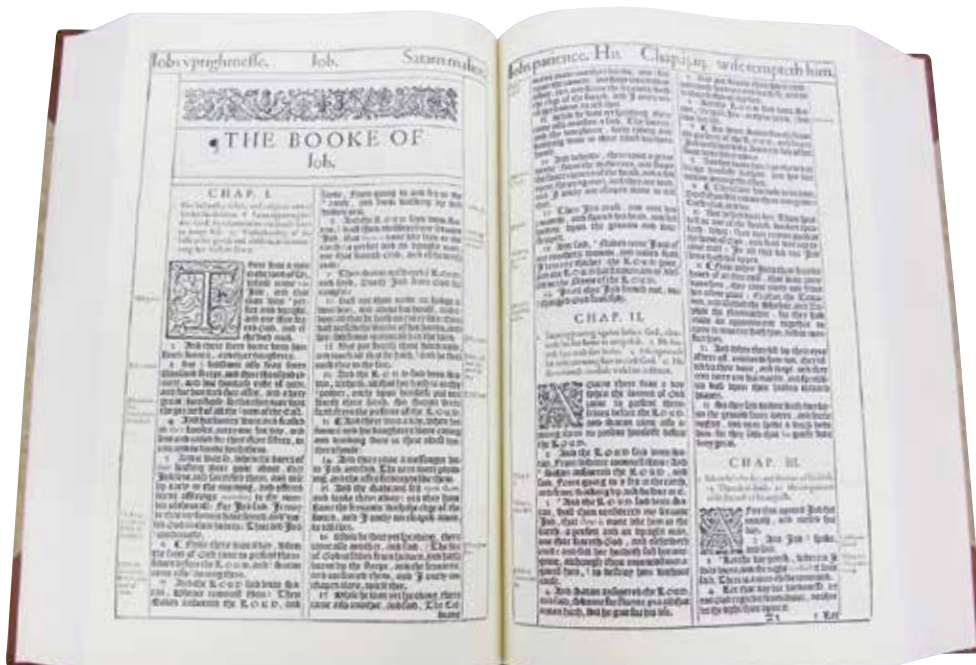
1976年 / Paradine / 紙 / 西南学院大学図書館蔵

原資料 1526年 / ヴォルムス / 紙、活版 / 大英図書館蔵

最初期の英語聖書として知られているのは、14世紀の教会改革者ジョン・ウイクリフ（1320-84）の翻訳による中英語聖書（ウイクリフ訳聖書）である。しかしながら、ウイクリフ訳聖書は後の時代の訳業には大きな痕跡を留めておらず、欽定訳聖書に至るまでの近代英語聖書の系譜は、このティンダル訳聖書に遡ると考えられる。ティンダル訳聖書とは、オクスフォード大学出身の宗教改革者ウィリアム・ティンダル（1494頃-1536）によって初期近代英語に翻訳され、出版された聖書である。ティンダルは本国イギリスにて俗語聖書を出版することが許されなかったため、1525年にケルンにて聖書の一部を印刷、1526年にヴォルムスにて印刷工ピーター・シェッファーを通じて新約聖書の全体を出版した。以後もティンダルは聖書の訳業を継続するが、1536年に異端の廉で火刑に処され、その訳業は中断された。本資料は1526年版の複製品である。（下園）



16.
ジュネーヴ聖書（複製）
 Geneva Bible (Facsimile)
 1977年／講談社／
 紙／西南学院大学図書館蔵
 原資料
 1560年／ジュネーヴ／
 紙、活版

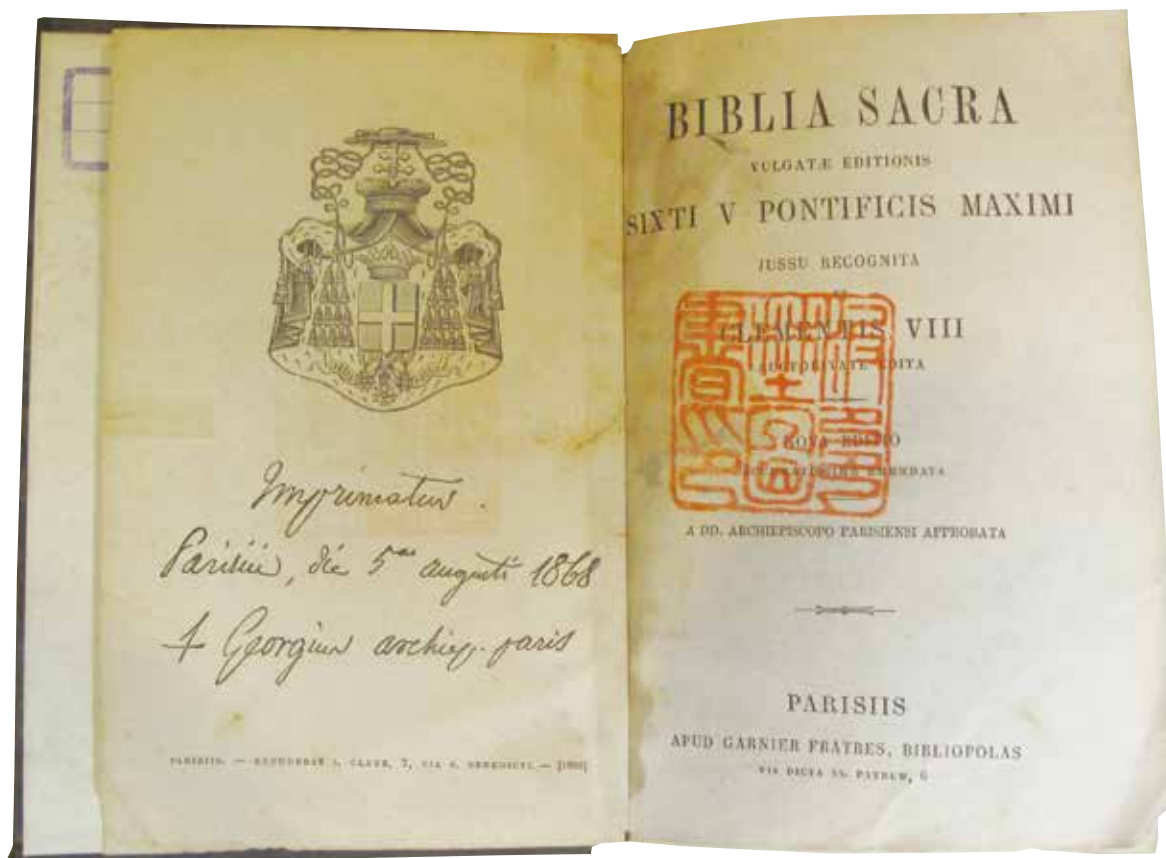


17.
欽定訳聖書（複製）
 King James Version
 (Facsimile)
 1982年／南雲堂／紙／
 西南学院大学図書館蔵
 (First Facsimile Edition:
 1911年／Oxford University
 Press)
 原資料
 1611年／ロンドン／紙、活版

ティンダル訳聖書ののち、カヴァーデイル聖書、マシュー訳聖書、大聖書という流れを経て出版された英語聖書がジュネーヴ聖書（資料16）である。1557年にジュネーヴにて新約が出版され、1560年には旧約を含む完全版が出版された。その安価さと読み易さゆえに、1644年までに少なくとも140もの版を重ね、世俗の人々の間で長らく使用され続けた。

欽定訳聖書(Authorized Version or King James Version (KJV)、資料17)は、近代英語聖書の頂に位置づけられる聖書である。従来普及していたジュネーヴ聖書は、国王に批判的な註を含んでおり、これを問題視した英国王ジェームズ一世の命によって1604年より新たな英語聖書の翻訳が始まった。翻訳が完遂し初版が出版されたのは1611年である。初版のKJVは、教会での講読使用という目的のため、大型かつ過度な装飾が控えられた仕様となっていた。資料17はこの1611年版の複製である。

上記のように、初版のKJVは古代・中世のパンデクト聖書のように大型で用途も限定的であったが、初版後まもなく安価な普及版も出版されており（新約聖書は1612年、旧約聖書は1617年）、以後長らく、英語聖書の標準版としてKJVは普及し続けてきた。現在、英語圏ではNew Revised Standard Version (NRSV)をはじめとするさまざまな現代版英語聖書が普及しているが、その格調の高さからKJVも未だに出版され続けており、多くの人々に愛されている。（下図）



18.

シクスト・クレメンティーナ版ウルガタ聖書

Sixto-Clementine Vulgate

1892年/パリ/紙/西南学院大学図書館蔵(波多野培根氏旧蔵)

グーテンベルクによって発明された活版印刷機で最初に出版された聖書は、聖ヒエロニムスによって改訂されたラテン語のウルガタ聖書(Biblia Sacra Vulgata)を底本とする『42行聖書』(1455頃)である。写本ごとに本文が異なる現状を憂えた教皇ダマスス一世は、ローマ教会会議(382)に際し、聖ヒエロニムスに聖書の改訂を依頼したのであった。聖ヒエロニムスは383年にローマで四福音書の改訂を始めた。その改訂の方針は、ギリシア語本文を写本の中から探し出し、それと照合しながら意味のずれたラテン語訳を修正し、意味の合致した訳は残すことにあった。さらに、聖ヒエロニムスはヘブライ語を学び、ヘブライ語の写本を入手し、ヘブライ語本文との照合によるラテン語訳聖書の改訂に長い年月をかけた。ウルガタ聖書は、8世紀の終わりには西欧キリスト教において最も利用される聖書となり、以来、教会の典礼用および教理の典拠として用いられてきた。なお、「ウルガタ」とは、「公布された」の意である。

宗教改革期にはルターをはじめとする指導者たちのもと、新たに改訂された聖書が、ウルガタ聖書に代わって流布するようになる。こうした中、カトリック教会はトリエント公会議(1545-63)において、ウルガタ聖書が権威あるもの(authentica)であることを宣言した。さらに、その批判校訂版の発行を決定し、教皇シクストゥス五世のもと1589年に批判校訂版の印刷が完了した。ところが、これは欠陥の多い校訂であったため、その出版は見送られた。その後、校訂作業がやり直され、教皇クレメンス八世によって、1592年に批判校訂版『シクスト・クレメンティーナ版ウルガタ聖書』(Biblia Sacra Vulgatae versionis Sixti V iussu recognita et Clementis VIII auctoritate edita)が出版され、これが標準となった。本資料は本学高等学部名誉教授の波多野培根氏の旧蔵である。(宮川)



クリスマス童謡
Ein Kinderlied auff die Weihenachten

空高くから私は来ました、
Von himel hoch da kom ich her,
新しい良き報せを伝えにきました、
ich bring euch gute newe mehr,
たくさんの良き報せを伝えにきました、
Der guten mehr bring ich so viel,
その報せを、歌って語って聞かせましょう。
dauon ich singen vnd sagen wil.

〈バプスト賛美歌集〉の部分拡大図

19.

バプスト賛美歌集

Babst Hymnbook (Facsimile)
1988年 / Baerenreiter Verlag / 紙
原資料 1545年 / ライプツィヒ / 紙、活版

1545年にライプツィヒで出版された『バプスト賛美歌集』は、ルターの生前最後の賛美歌集である。この賛美歌集はルターの編集であり、序文もルターによって書かれている。その名称は、印刷者であるヴァレンティン・バプストの名に由来する。宗教改革期は、俗語聖書のみならず、俗語の賛美歌が普及し始めた時代でもある。俗語で賛美歌を歌うという新たな慣習を広めたのはルターであり、彼は数多くのドイツ語賛美歌の作詞を手がけている。ルターを端緒とする俗語賛美歌の伝統は、ルター派のみならず、プロテスタントの諸教会に広まってゆき、今日にまで継承されている。(下園・西山)



宗教改革と賛美歌

西南学院大学博物館学芸調査員 西山萌

旧約聖書には、「モーセとイスラエルの民は主を賛美してこの歌をうたった」(出エジプト記15:1)とある。さらに、賛歌、嘆きの歌、感謝の歌を集めた『詩篇』には、「新しい歌を主に向かって歌え」(詩篇96、98、149:1ほか)という呼びかけがある。

このように、古代より人々は神を賛美するために歌を用いた。それはキリスト教にも受け継がれている。新約聖書には、「一同は賛美の歌をうたってから、オリブ山へ出かけた」(マタイによる福音書26:30、マルコによる福音書14:26)という言葉があるようにイエスも彼の弟子たちも祈りの際に歌を歌っていた。4世紀のミラノで活躍したアンブロシウス(339頃-397)は、東方教会から賛美歌と交唱形式を導入し、儀礼と教理のためではなく信徒を励まし慰める賛美歌を自ら作ったとされる。アウグスティヌス(354-430)は『告白』において、ミラノの教会でアンブロシウスと信徒たちが東方教会の伝統に従い声も心もひとつにして賛美歌を歌ったことを記している¹。アンブロシウスによる賛美歌の改革は、西方教会における賛美歌の用い方や唱法を發展させ、後にアンブロシウス聖歌と呼ばれる様式を作り出した。このように歌を以て礼拝する伝統は古代より連続と続いていたのである。

6世紀末の教皇グレゴリウス1世(540頃-604)の改革以来、ミサにおける歌は、聖歌隊や聖職者がラテン語で歌うことが常であった。この教皇の名にちなむとされるグレゴリオ聖歌は、アンブロシウス聖歌と並ぶ西方ラテン教会の最古の典礼聖歌といわれている。専門教育を受けた司祭たちが執り行うカトリック教会の礼拝では、一般会衆が神を賛美するために歌う機会はほとんどなかった。これに対して、礼拝における、賛美歌による会衆参加を積極的に導入し、宗教改革の信仰を礼拝のなかで具体化しようと努力したのが、マルティン・ルター(1483-1546)である。礼拝における神のことばの中心性と万人祭司性がルターの賛美歌をめぐる努力の神学的背景であった。

ただし、ルターは礼拝改革に着手する際、従来の礼拝式を全く廃止する意向はなかった。すなわち、時間が経つなかでカトリック教会によって変えられ、付加されてきた礼拝要素のなかでルターが問題と考えるものを取り除こうとしたのである。それ以外のところは、急激な変化を避け、基本的にラテン語礼拝を行うが、説教は自国語(ドイツ語)とした。また、会衆の歌う賛美歌については、自国語にしたいが自国語の歌が少なかったために、音楽に造詣が深かったルターが自ら賛美歌の作詞作曲を行うこととなった。その際ルターは、一般の信徒にわかりやすいように、賛美歌の歌詞にドイツ語をとり入れていく。これは複雑な文法のラテン語が当時の一般の信徒にとって非常に難しい言語であったためである。ルターは旋律の面でも貢献したが、その多くは中世の賛歌、典礼歌、祈禱歌、世俗歌などの古い旋律を修正・改作してつくられた。ルターの宗教改

革の特徴のひとつは、仲間と共に改革を進めたという点である。賛美歌や礼拝音楽の面でルターに協力したのがヨハン・ヴァルター(1496-1570)である。彼は当時におけるドイツ有数の作曲家であり、ルターの生涯の友であった。ヴァルターの貢献により、ルターの典礼音楽における改革は大きな広がりを見せるに至った。1523年、ブリュッセルで2人の修道士が宗教改革的信仰ゆえに火刑に処せられたときにつくった「われらは新しい歌を歌う」が、ルターの最初の賛美歌である。翌年には、ヴァルターの協力や自らの努力によって8曲(内4曲はルターによる)を収めた最初の賛美歌集『8つの賛美歌集』がヴィッテンベルクで出版された。その後、宗教改革の拡大に伴い、各地で賛美歌集が編纂され、会衆全員が参加する礼拝の基盤が整えられていった。各国語でオランダから北欧諸国にも広がった会衆の賛美歌は、ルター派の枠を超え、プロテスタンティズムの目印にもなった。宗教改革時代につくられた賛美歌集に入っている歌は、現在のプロテスタント教会における賛美歌の源になっている²。ルターの宗教改革以降、賛美歌を題材にした楽曲、様式が生み出され、歌うための伴奏楽器としてオルガンが用いられるようになり、その結果、オルガン音楽がその後次々と誕生した。

主要参考文献

- 木村佐千子「ルターと音楽」『獨協大学ドイツ学研究』第74号、2018年3月
徳善義和『ルターと賛美歌』日本キリスト教団出版局、2017年
佐々木しのぶ、佐々木悠『キリスト教音楽への招待—聖なる空間に響く音楽—』教文館、2012年
川端純四郎『CD案内キリスト教音楽の歴史』日本基督教団出版局、1999年
日本ルーテル神学大学ルター研究所編『ルターと宗教改革事典』教文館、1995年
今橋朗、竹内謙太郎、越川弘英、川端純四郎監修『キリスト教礼拝・礼拝学事典』日本キリスト教団出版局、2006年
宮谷宣史訳『アウグスティヌス著作集第5巻Ⅱ告白録(下)』教文館、2007年
日本バプテスト連盟新生讃美歌編集委員会編『新生讃美歌』日本バプテスト連盟、2003年

- 1 「少し以前からミラノの教会においてはこのように讃美歌と聖歌により慰め、励ましあうために、信徒たちは大変熱心に声と心をもひとつにして歌うことを行い始めていました。[...] このとき東方教会の習慣に従い、讃美歌と詩篇を歌うようになりましたが、それは人々が不安と苦痛により意気消沈しないためでした」(宮谷宣史訳『アウグスティヌス著作集第5巻Ⅱ告白録(下)』第9巻第7章第15節。)
- 2 『新生讃美歌』(日本バプテスト連盟新生讃美歌編集委員会編、2003年)に入っている歌のうち、ルターが作詞および作曲したものは次のとおりである。「今こそ主よわれ安らかに Mit Freud und Freud ich fahr dahin」(新生讃美歌144)、「いざ来たりませ Nun komm, der Heiden Heiland」(同156)、「天より降りて Vom Himmel hoch, da komm ich her」(同182)、「主死にたまえり Christ lag in Todesbanden」(同238)、「深き悩みより Aus tiefer Not schrei ich zu dir」(同474)、「神はわがやぐら Ein feste Burg ist unser Gott」(同538)。

補遺Ⅰ

宗教改革 500 周年記念

2017 年は宗教改革 500 周年にあたり、世界各国で宗教改革 500 周年記念イベントが開催された。宗教改革の発端の地であるドイツでは『九十五カ条の論題』が張り出されたとされている 10 月 31 日が 500 周年記念として祝日となり、各地で記念礼拝やイベントが執り行われた。日本でも宗教改革 500 周年を記念するさまざまな行事が催された。

記念される宗教改革

日本で催された記念行事をいくつか紹介したい。2017 年 11 月 23 日、日本福音ルーテル教会と日本カトリック司教協議会が長崎の浦上教会において共同礼拝を開催した。また、日本聖書協会では、2017 年 9 月 12 日から 9 月 22 日までを「宗教改革 500 周年記念ウィーク」として、講演やコンサートといったさまざまな行事が催された。また、日本基督教学会では、2017 年度大会をルーテル学院大学で開催し、「宗教改革とポスト近代」をテーマとするシンポジウムが催された。

この年には、企業や一般大衆の間でもさまざまな企画が催された。たとえば、宗教改革 500 周年記念グッズが世界各地で制作され、ルター肖像画がプリント（印刷）されたポスターなどが市場に現れた。日本においても、キリスト新聞社が「宗教改革 500 周年ゲームコンテスト」を開催し、最優秀賞を受賞したボードゲーム「ルターの宗教大改革」（資料 20）が制作・販売された。その他、世界中で数多くの宗教改革に関する研究書が出版された。

このように、宗教改革は、その始まりから 500 年を経た現在も、多くの人々の心に留められ、さまざまに記念されている。つまり、宗教改革とは、過去に起こった、既に完遂した歴史的事象なのではなく、現代もお民衆の中に息づいている一つの精神なのである。



20.

ルターの宗教大改革

The Reformers

2017 年 / 日本 / ボードゲーム / キリスト新聞社・砂漠のキタキツネ

補遺Ⅱ

西南学院と宗教改革 500 周年記念

2017年には、西南学院においても、宗教改革500周年を記念するさまざまな企画が催された。まず、ドイツ総領事館が制作した宗教改革500周年記念ポスターが学内各所に掲示された(写真1-3)。また、安積道也音楽主事の指揮による記念コンサートも開催された(画像1)。そのほか、春季キリスト教フォーカス・ウィークでは、宮庄哲夫氏(同志社大学名誉教授)によるルターと宗教改革をテーマとした講演が行われるなど、単なるお祝いではなく、まさに「自らの立つ場所」を問う重要な機会となった。



写真 1



写真 2



写真 3



画像 1

写真・画像提供：西南学院総務部キリスト教活動支援課

中世を継承した宗教改革——聖書史の考察に即して——

西南学院大学博物館学芸員 下園知弥

序論

プロテスタントの信仰原理の一つは「聖書のみ」(sola scriptura)である¹。この信仰原理は、ルターに代表される宗教改革者たちの神学的特徴を端的に言い表している。聖書を読むことが最も重要な信仰活動であると考えた宗教改革者たちは、民衆たちが聖書を自ら読めるようにすべく、聖書の俗語翻訳に次々と取り組んでいった。その結果、宗教改革は「西欧における俗語聖書の普及」という聖書史上極めて重要な事業を成し遂げるに至った。——このような語り口が、宗教改革と聖書の関係についての最も平明な解説の仕方であろう。実際、上記のような解説は、宗教改革はどのような点において改革だったのかという疑問に対して、その回答の一つを非常に明快に示している。

しかしながら、歴史の大体の事象がそうであるように、或る帰結に至るまでの流れは、一般に語られているよりも遥かに複雑である。確かに、1517年に始まった「宗教改革」(Reformation)は、西欧における信仰ないし聖書の改革運動であった。けれども、中世の迷妄を打ち破るべく近代的な改革者たちが突如現れて、嵐のように改革を成し遂げていった、という風に理解してしまうと、事実をいささか捻じ曲げてしてしまうことになる。というのも、アウグスチノ会の修道士であり大学の聖書教授でもあったマルティン・ルターという人物がそうであったように、宗教改革の理念や活動は、中世で形成された伝統を大部分継承していたからである。

本論考では、聖書史に焦点を当てて、中世と宗教改革の連続性をいくらか明らかにすることにより、「改革」の内実について理解を深める一助としたい。

1. 中世における俗語聖書の伝統

西欧中世において最も流通していた聖書は、ヒエロニムス(Hieronymus, c. 340–420)の翻訳によるラテン語聖書、すなわち「ウルガタ」(Vulgata)である。8世紀までにはウルガタは西欧世界に普及したと考えられているが、ウルガタが普及する以前には「古ラテン語聖書」(Vetus Latina)が存在していた²。加えて、ゴート語の聖書である「ゴシック聖書」(The Gothic Bible)の存在も確認されている。ゴシック聖書とは、ゴート人たちの間で宣教活動を行っていた大司教ウルフイラ(Ulfilas, c. 310–83)がギリシア語からゴート語に翻訳した聖書である³。このゴシック聖書は、断片ではあるが複数の写本が現存しており、5世紀の『ヴェロネンシス写本』(Codex Veronensis)や6世紀初頭の『アルゲンテウス写本』(Codex Argenteus)などが知られている。

ウルガタの普及後も、聖書のテキストはさまざまな西欧諸語に翻訳され、広まっていた。9世紀の古サクソン語詩「ヘーリアント」(Heliand)は、『ディアテッサロン』(Diatessaron)——四福音書を一つの物語にまとめたラテン語詩——を基にしており、聖書のテキストが西欧の俗語に翻訳された最初期の例である⁴。また、最初期の古英語訳として、『リンディスファーン福音書』(Lindisfarne Gospels)の行間に記された10世紀頃の古英語訳⁵や、11世紀初頭までに古英語に完訳されていた「ヘクサテューク」(Hexateuch)⁶などが挙げられる。他にも、古フランス語訳は10世紀以降⁷、イタリア語訳は14世紀以降⁸に現れている。

完訳された俗語聖書としては、『13世紀フランス語聖書』(Bible Française du XIIIe siècle)⁹や、14世紀にウィクリフ(John Wycliff, c. 1320/30–84)が中英語に翻訳した『ウィクリフ訳聖書』(Wycliff Bible)¹⁰、ザイナー(Günther Zainer)の工房で1475年頃に印刷された『ザイ

ナー聖書』(Zainer Bible)¹¹などが挙げられる。このような中世における俗語聖書の数々は、一部は間もなく廃れたり教会から発禁処分を受けたりしたが、一部は民衆の間で広く流通していた。

以上のように、中世においても俗語聖書ないし俗語に翻訳された聖書のテキストは数多く存在していた。カトリックが聖書の俗語翻訳を禁じていたために中世においては俗語聖書が普及しなかったという俗説は、半ば正しく、半ば誤りである。というのは、カトリックは聖書の翻訳活動それ自体は禁じておらず、翻訳が禁止されたのは、教会への攻撃ないし異端的思想・活動が発生した場合に限ったことだったからである¹²。つまり、カトリックの教会政策が俗語聖書の普及をある程度妨げていたのは事実だが、その政策のゆえに俗語聖書が全く、あるいはごく少数しか存在していなかった、というのは誤解なのである。

したがって、「俗語聖書への翻訳」という考え方それ自体は、宗教改革者が創始したのではなく、むしろ時代の流れの中から、つまり中世の文化の中から自ずと生じてきた発想であると言えよう。

2. ギリシア語・ヘブライ語聖書の参照

宗教改革の真の革新性は、聖書を俗語へ翻訳したという点ではなく、ギリシア語・ヘブライ語原典から翻訳したという点にこそある、といった見解についてはどうだろうか。確かに、ルターは聖書を翻訳するにあたって、当時流通していたウルガタではなく、ギリシア語・ヘブライ語の聖書を底本しており、ティンダルやツヴィングリといった他の宗教改革者らもギリシア語・ヘブライ語から俗語への翻訳を行っていた。したがって、この種の翻訳活動が宗教改革の特徴の一つであるのは確かだろう。しかしながら、宗教改革以前にも、聖書はギリシア語やヘブライ語で読まれていたし、ラテン語への翻訳活動も行われていたという点には注意が必要である。

ルネサンス以前、ヘブライ語やギリシア語の知識は西欧世界から大部分失われていたが、完全に忘却されていたわけではなかった。それらの言語の知識を熟望し、あるいは実際に習得していた神学者たちがいくらか存在していた。たとえば、アベラール(Petrus Abelardus, 1079–1142)は、修道女たちに宛てた書簡で、聖書を理解するためにラテン語・ギリシア語・ヘブライ語の学修を推奨しており、その模範例として女子修道院長エロイーズを挙げている¹³。ロジャー・ベーコン(Roger Bacon, c. 1220–67)は、聖書のラテン語訳を点検し修正するために、学者たちがヘブライ語・ギリシア語の正確な知識を持つことを願っていた¹⁴。リラのニコラウス(Nicolaus Lyranus, c.1270–1349)は、キリスト教徒でありながらヘブライ語も修得しており、その知識に基づいて聖書解釈を行っていた¹⁵。

このような流れに続いて到来したルネサンス期には、古典語を修めた知識人たちが多数活躍した。ロレンツォ・ヴァッラ(Lorenzo Valla, 1407–57)やエラスムス(Desiderius Erasmus, 1466–1536)は、ルネサンス期を代表するギリシア語聖書の研究者である。エラスムスが1516年に出版した『ギリシア語新約聖書』(Novum Instrumentum Ommne)〔直訳すると『万人のための新しい道具』〕には、ギリシア語テキストに加えて、ウルガタおよびエラスムス自身によるラテン語訳も収録されていた。ヘブライ語に関しても、ロイヒリン(Johannes Reuchlin, 1455–1522)が1506年に『ヘブライ語入門』(De Rudimentis Hebraicis)を著し、ヘブライ語聖書を読むための基本的なツールとして大

いに歓迎された。また、ロイヒリンはヘブライ語テキストおよびそのラテン語訳が記された『七つの痛悔詩篇』(Septem Psalmi Poenitentiales)を1512年に出版している。さらに、1514年から1517年にかけて、スペインの枢機卿フランシスコ・ヒメネス・デ・シスネロス(Francisco Ximenes de Cisneros, 1436-1517)の推進により、ヘブライ語・ギリシア語・カルデア語・ラテン語で聖句が記された『多言語対訳聖書』(Polyglot)が制作され、1522年に出版されている¹⁶。

このように、ヘブライ語・ギリシア語で聖書を読むことに関しても、宗教改革の先駆者たちは存在している。とはいえ、ヘブライ語・ギリシア語の聖書から俗語へ翻訳したという点では、おそらく宗教改革者たちが先駆であろう。この種の翻訳の最初の例は、ルターが1522年に出版した『ドイツ語新約聖書』(Das Neue Testament Deutsch)である。したがって、ここに宗教改革運動における真に革新的な側面を見出すことができる。

だがやはり、この革新は中世以来の聖書研究の蓄積があって初めて成立したものであろう。ルターは聖書を研究・翻訳するに際して、リラのニコラウスの『聖句註解』(Postilla)や、エラスムスの『ギリシア語新約聖書』、ロイヒリンの『ヘブライ語入門』といった文献を参照していた¹⁷。作者不明の格言「リラのニコラウスが堅琴(リラ)を奏でなかったら、ルターは踊らなかったであろう」(Si Lyra non lyrasset, Lutherus non saltasset.)¹⁸は、やや大げさであるにしても、宗教改革期の聖書研究・翻訳が中世以来の聖書研究の成果に基づいているという事実を明瞭に言い表しているのである。

3. 聖書主義

続いて、「聖書のみ」(sola scriptura)という信仰原理の解釈を軸として、中世と宗教改革の連続性を考察したい。既に述べたように、「聖書のみ」はプロテスタントの思想を象徴する信仰原理の一つである。この言葉は、宗教改革者たちの信仰を端的に表現した言葉であり、聖書と並んで教会の教理や伝統も重視するカトリックの信仰としばしば対比される。「聖書のみ」と「聖書以外も」の二項対立は非常にわかりやすい図式であるが、単純化されているだけに、本質的な点を見逃してしまう危険がある。その危険は、宗教改革者にもカトリックにも該当する。

3-1. 宗教改革者における聖書主義

まず、宗教改革者についてであるが、「聖書のみ」に象徴される彼らの信仰は、聖書以外のすべてのカトリック的な思想・文化・伝統を捨て去った、という意味ではない。聖書の言葉を典拠にしていない(聖書が根拠となり得ない)教理を改めるとというのが宗教改革者の真意であり、「聖書のみを根拠とする教理の形成」が宗教改革の目的であった。そのことは、ルター派の信仰を表明した『アウグスブルク信仰告白』(Confessio Augustana)においても明確に示されている。

上述の条項を、われわれは(国会)招集状に従って、われわれの信仰告白とわれわれの教師たちの教理の表明として提出します。もしどんな人であれ、いずれかの点で欠けていると考えられるなら、われわれは神聖な聖書を根拠として、更に詳しく説明を提出する用意があります。¹⁹(傍点筆者)

聖書を根拠とする教理の形成を目指したということは、言い換えれば、聖書を根拠として同じ結論に達しているならば、カトリック神学との合同・一致もあり得た、ということである。実際、宗教改革者の神学的言説に注目してみると、彼らは古代・中世の伝統の中で形成された教説を躊躇なく参照し、時には肯定している。たとえば、ルターはアウグスティ

ヌス(Augustinus, 354-430)や大グレゴリウス(Gregorius Magnus, c. 540-604)といった教父たちの教説に通じてだけでなく、リラのニコラウスやピエール・ダイイ(Pierre d'Ailly, 1351-1420)といった比較的時代の近い神学者たちの教説も肯定的に受容している²⁰。また、カルヴァンは多数の教父、とりわけアウグスティヌスの神学に影響を受けており、『キリスト教綱要』(Institutio Christiana Religionis)では随所に教父の名とその教説が挙げられている。いま名前を挙げた神学者たちは、カトリックにおいても重要視されてきた神学者たちである。このように、宗教改革者たちは、教会が伝統的に形成してきた神学のすべてを一概に否定しているわけではなかった。重要なのは、聖書の言葉に基づいた教説であるか否かであって、時代や教派ではなかったのである。

3-2. カトリックにおける聖書主義

カトリックの信仰についても、「聖書のみではない」という点をあまりに強調してしまうと、大きな誤解に至ってしまう危険がある。聖書はキリスト教にとって、教派を問わず、等しく聖典である。聖書をめぐる問題の数々は、聖書の権威性ではなく、聖書の解釈をめぐって展開されるのであり、宗教改革も同様であった。すなわち、宗教改革者たちは中世において形成・確立したカトリックの教理や伝統のいくつかについて——代表的には贖宥状の理論や聖人崇敬について——聖書に基づかないと批判したが、その一方で、カトリックは聖書から導き出し得ると解釈していた。つまり、カトリックもまた聖書主義だったのである。では、当時のカトリックの聖書主義はどのようなものだったのであろうか。

宗教改革者たちが俗語聖書の普及に努めたのに対して、カトリックは民衆の理解できないラテン語聖書に固執した、というのが一般的な印象だと思われる。この印象は、宗教改革期に開催されたトリエント公会議(1545-63)において、カトリックがラテン語聖書の権威性を再主張したことに基づくものであろう。しかしながら、公会議で決議された教令と、宗教改革期にカトリックが行なった聖書事業を鑑みれば、この印象には修正が必要であることがわかる。まずはトリエント公会議の聖書に関する教令を確認してみよう。

「第4総会 聖書のウルガタ版の承認と聖書解釈の方法について」

同じ聖なる教会会議は、聖書のラテン語版すべての中で、どれを決定版とすべきかを定めることが神の教会にとって非常に有益であると考え、何世紀にもわたり教会において使用され承認されてきた古いウルガタ版を公の朗読、論議、説教、解説において使用すべき決定版とみなすことを決定し、宣言する。たとえどのような理由からであっても、この版を拒否しようとしたり、または拒否したりしてはならない。

さらにまた、勝手気ままな意見を抑制するために、次のことを定める。すなわち、誰一人としてキリスト教の教義に関係がある信仰と道徳について、自分個人の判断に頼ってはならない。また聖にして母なる教会が昔から支持し、今も支持している聖書の解釈に反して、自己流に解釈をしてその意味を曲げてはならない。聖書の真の意味と解釈を判断するのは教会の職務だからである。また、たとえそれが一般に公開されないものであっても、教父たちの一致した意見に反した聖書の解釈をしてはならない。²¹

この教令は、一見するとウルガタの権威性を宣言しているだけのように思えるが、注意深く読めば、ウルガタ以外の聖書の権威を否定したり、翻訳や解釈を無条件に禁止したりし

ていないことがわかる。さらに、ウルガタについても、ウルガタというラテン語聖書を決定版と言われているが、当世に流布していた版——その翻訳の悪辣さを人文主義者や宗教改革者たちは批判していた——をそのまま使用し続けるとは言われていないのである。

実際、16世紀末に、教皇シクストゥス五世と教皇クレメンス八世によってウルガタの改訂が遂行されている。この『シクスト・クレメンティーナ版ウルガタ』(*Sixto-Clementina Vulgata*)は、刷新されたウルガタとして、カトリックの新たな公式聖書となった。さらに、ウルガタの改訂が試みられた一方で、カトリックは俗語聖書の翻訳にも着手していた。宗教改革者の翻訳活動からは出遅れていたが、フランス語の『ルーヴァン聖書』(*Louvain Bible*)や英語の『ランス＝ドゥエ聖書』(*Rheims-Douai Bible*)といったカトリック版俗語聖書が宗教改革期に出版されている。伝統的なラテン語聖書の改訂も新たな俗語聖書の翻訳も同時期に行なっていたことを鑑みれば、この時代のカトリックが旧来の聖書に固執していたとは到底考えられず、むしろ精力的に聖書の装いを刷新しようとしていたと考えるべきである。

したがって、聖書に対するスタンスについて言えば、一般に考えられているよりもずっと、16世紀の宗教改革者とカトリックの思想・活動は近い位置にあった。すなわち、宗教改革者たちはカトリック神学の伝統をある程度肯定的に捉えており、中世で形成された聖書神学のすべてを捨て去ろうとはしなかった。カトリックもまた、宗教改革者に近い改革意識²²を有しており、伝統的なウルガタを継承しつつも、宗教改革者とは別の方針で聖書の刷新を試みていた。つまり、中世以来の聖書の伝統を或る面では継承しつつ、或る面では刷新しようとしていたという意味では、両者は同じ意識を共有していたのである。

結論

本論考では、宗教改革が中世の伝統を継承していることを、聖書史の考察によっていくつか明らかにした。「俗語聖書の普及」は宗教改革の重要な意義の一つであるが、その実現の背景には、宗教改革以前から形成されていた中世の伝統が密接に関わっている。すなわち、俗語聖書の伝統にせよ、ギリシア語・ヘブライ語に遡っての聖書研究・聖書翻訳にせよ、中世に起源を見出すことができる。加えて、宗教改革者たちの聖書神学とカトリック神学者たちの聖書神学は、中世から継承された聖書の刷新に努めたという点で、一般的な印象よりもずっと近い内容を持っていた。むしろ、ウルガタの権威性や解釈・翻訳の方針をめぐる、宗教改革者とカトリック神学者は異なる方向を向いていたが、その差異もまた、聖書こそが信仰の核であるという同じ理念から分裂して出てきたものである。つまり、中世の伝統を継承しつつ、時代の状況に即して聖書を刷新しようとしたのは、宗教改革者もカトリック神学者も同様だったのである。したがって、16世紀の西欧において現出した宗教の「改革」は、必ずしも中世との決別ではなく、むしろ継承であり、刷新であったと言う方が、少なくとも聖書史においては妥当な表現であるだろう。

1 プロテスタントの信仰原理は「聖書のみ」(*sola scriptura*)や「信仰のみ」(*sola fidei*)が特に知られているが、この「~のみ」(*sola*)は20世紀になって確立した用語であり、宗教改革者自身が標語として唱えていたわけではない。また、上記の二つのほかに、「恩寵のみ」(*sola gratia*)や「キリストのみ」(*sola Christi*)といった他の *sola* も提唱されている。Cf. Josef Hofer und Karl Rahner hrsg., *Lexikon für Theologie und Kirche, 9 Band*, Freiburg, Herder Verlag, 1964, „Sola-fide-Prinzip,“ S. 859–60; „Sola-scriptura-Prinzip,“ S. 863.

2 Frans van Liere, *An Introduction to the Medieval Bible*, Cambridge University Press, 2014, pp. 80–83.

3 *Ibid.*, pp. 180–181.

4 *Ibid.*, pp. 182–186, esp., p. 183.

5 *Ibid.*, p. 187.

6 ヘクサテュークとは、創世記からヨシュア記までの、聖書の最初の6巻を収めた形式の書物のこと。

7 Richard Marsden and E. Ann Matter eds., *The New Cambridge History of the Bible (NCHB), volume 2, From 600–1450*, Cambridge University Press, 2012, p. 251.

8 Clieve R. Sneddon, “The Bible in French.” In *NCHB, volume 2*, p. 270.

9 Liere, *An Introduction to the Medieval Bible*, p. 194.

10 Richard Marsden, “The Bible in English.” In *NCHB, volume 2*, pp. 230–36.

11 David H. Price, “The Bible and visual arts in early modern Europe.” In *NCHB, volume 3*, p.723; Liere, *An Introduction to the Medieval Bible*, p. 199.

12 Andrew Gow, “Challenging the Protestant Paradigm.” In Thomas J. Hofferman and Thomas E. Burman eds., *Scripture and Pluralism: Reading the Bible in the Religiously Plural Words of the Middle Ages and Renaissance*, Leiden/Boston, Brill, 2005, p. 176.

13 Letter 9; デイヴィッド・ラスカム『12世紀ルネサンス——修道士、学者、そしてヨーロッパ精神の形成』鶴島博和ほか編訳、137–38頁。

14 Marie-Luise Ehrenschtendner, “Literacy and the Bible.” In *NCHB, volume 3*, p. 707.

15 リラのニコラウスのヘブライ語の学識については次の文献を参照。Deeana Copeland Klepper, *The Insight of Unbelievers: Nicholas of Lyra and Christian Reading of Jewish Text in the Later Middle Ages*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 2007, esp. p. 8.

16 John C. Olin, *Catholic Reform: From Cardinal Ximenes to the Council of Trent 1495–1563*, New York, Fordham University Press, 1990, p. 61.

17 ルターの聖書研究の変遷については次の文献を参照。ウイレム・J・コーイマン『ルターと聖書』岸千年訳、聖文舎、1971年。

18 Robert Kolb and Irene Dingel and Lubomír Batka eds., *The Oxford Handbook of Martin Luther's Theology*, Oxford University Press, 2014, pp. 75–76.

19 フィリップ・メランヒトン『アウグスブルク信仰告白』ルター研究所訳、リトン、2015年、94頁。

20 一例を挙げると、ルターは『教会のバビロン捕囚について』(*De captivitas eiusdem Babylonica ecclesiae praeludium*)において、ピエール・ダイイの神学的解釈を高く評価して、次のように記している。「私はかつて、スコラ神学を貪欲に学んでいた頃に、カンブレイ枢機卿の博士〔ピエール・ダイイ〕から『命題集』第4巻の註解を聞いて、思索する機会を与えられました。彼は大変鋭い語り口で次のように述べていました。「聖壇の上には、真なるパンとワインがあるのであって、ただパンとワインの偶有があるのではないという考え方は、教会がそれに反する決議をしなかったならば、より容認し得る説であり、過剰な奇跡が語られることも少なく済んだであろう」と。私は、その後、このような決議をしたのがトマス派の、つまりアリストテレス派の教説に従った教会であるのを知って、より大胆に考えるようになりました。私は悩みましたが、結局、先の言葉によって私の良心は定まりました。」(*D. Martin Luthers Werke, Kritische Gesamtausgabe* (Weimarer Ausgabe), 6. Band, Weimar, Böhlau Verlag, 1966 (originally published 1888), S. 508)

21 H・デンツィンガー編、A・シェーンメッツァー増補改訂『カトリック教会文書資料集 信経および信仰と道徳に関する定義集』A・ジンマーマン監訳、浜寛五郎訳、エンデルレ書店、1974年、271頁。

22 旧来、宗教改革期にカトリック側が行っていた改革は「対抗宗教改革」(Counter-Reformation)と呼ばれていたが、今日では「カトリック改革」(Catholic Reform)と呼ぶのが一般的になっている。対抗宗教改革およびカトリック改革については、宮川由衣「カトリック改革——聖像画をめぐる教令を中心として——」(本図録28–30頁)を参照。

カトリック改革——聖像画をめぐる教令を中心として——

西南学院大学博物館学芸研究員 宮川由衣

はじめに

教会史における重要な出来事の一つに「カトリック改革 *reformatio catholica, katholische Reform, Catholic Reform, réforme catholique*」¹がある。第二次世界大戦以前の通史においては、カトリック教会における改革は、ルターなどによる宗教改革に対抗するカトリック側からの対応を示す概念、すなわち「反対宗教改革」の意味で用いられるのが通例であった。わが国においては、明治時代の西洋史学者、教育者として知られる箕作元八(1862-1919)がドイツで生まれた「反対宗教改革 *Counter-Reformation*」という概念を「宗教改革への反動」と邦訳しており、後にこれは「反動宗教改革」、「反宗教改革」、そして「対抗宗教改革」といった用語で定着している。このようなカトリック教会における改革をルターらによる宗教改革への反動と見る歴史観に基づいた「反対宗教改革」の概念は、いまだに高校世界史教科書や歴史用語集で通説として普及している。しかし、こうした歴史観は、19世紀末以降、とりわけ第二次世界大戦後の宗教改革史研究において、カトリック、プロテスタントを問わず研究者のあいだで見直されている。すなわち、今日において「カトリック改革」とは、「いわゆる中世後期において始まり、プロテスタントの改革、教会分裂の危機を契機として教皇制をもちとり、トレントの会議を通じて発展した教会の内的自発的刷新運動」²を指す概念として用いられているのである。

こうした内的自発的刷新運動としてのカトリック改革の主翼を担ったのがイエズス会であった。イエズス会は、イグナチオ・デ・ロヨラ (Ignacio de Loyola 1491-1556) によって1540年に創設された修道会である。日本では、1549年のザビエル (Francisco Xavier 1506-52) 渡来以来、1640年半ばまで約310名の会員が宣教活動に従事した。1605 (慶長10) 年には、信徒の数は全国で75万人に達したとされる³。

キリスト教の布教において教育を重視したイエズス会は、セミナリオと呼ばれる教育機関を設立した。ここではラテン語や西洋音楽の教育が行われたが、それらと並んで油絵や銅版彫刻や印刷などが教えられていたことが注目される。イエズス会の創設者であるイグナチオ・デ・ロヨラは、イメージを重視しており、イエズス会はイメージの伝播の速さとその効力を布教に最大限に活用していったのである。教会および信仰生活におけるイメージの使用、すなわちキリストや聖母マリアを描いた聖像画⁴の崇敬を積極的に認める教令は、カトリック改革期における最も重要な出来事であるトレント公会議の中で決定され、公布された (トレント公会議第25総会 1563年12月3日「聖人の取次ぎと崇敬、遺物、聖像画についての教令」)。これに先立ち、16世紀はじめの宗教改革期、とりわけ1523年から25年にかけては、ツヴィングリ主義が優勢であった地域を中心に各地で聖像画の撤去、破壊といった事態が頻発していた。こうした中、トレント公会議において示された聖像画をめぐる教令は、改革を通して自己認識されたカトリック教会における正統的信仰教義の重要な要素の一つとなったのである。

本稿では、はじめにカトリック改革という概念の成立史を確認したうえで、四期にわたる改革の内容を振り返る。さらに、カトリック改革期の最も重要な出来事であるトレント公会議で決定された教令のうち聖像画をめぐる教義の内容とその歴史的意味を考えたい。

「カトリック改革」の概念の成立

ルターなどによる宗教改革に対抗するカトリック側からの対応を示す概念として、「反対宗教改革 *Gegenreformation, Counter-Reformation*」という言葉が最初に用いたのは、ゲッティンゲン大学のピュッター (Johann Stephan Pütter) であると言われる。ピュッターは1776年の著書『アウクスブルク信仰告白 *Die Augsburgische Confession*』において、「反対宗教改革」を一つの精神・宗教現象としてではなく、法制史家の立場から、「カトリック領主がプロテスタント化された領地を、カトリック信仰生活再生のために奪回するための個々の行動」を指す諸々の現象として複数形で理解していた。さらに、「反対宗教改革」を精神史一般にわたる現象、カトリシズムの歴史的現象として理解したのがプロテスタントの史家ランケ (von Ranke) である。ランケは1843年『宗教改革時代のドイツ史 *Deutsche Geschichte im Zeitalter der Reformation*』の末尾の文章において、「宗教改革時代に続いて反対宗教改革時代が来た」と述べており、「反対宗教改革」を統一的な現象として把握している。「反対宗教改革」という時代概念をめぐる最初の大学講義が開かれたのは1876年、ボンにおけるリッター (Moriz Ritter) による「反対宗教改革時代のドイツ史」であり、この概念はドイツ以外の歴史家のあいだでも徐々に用いられるようになり、“*contre-réforme, Counter-Reformation, controriforma*”といった言葉が生まれた。

他方、ルターの宗教改革に先行する改革運動がすでにカトリック教会内部から起こっていたことを指摘し、それに「カトリック宗教改革 *katholische Reformation*」なる名称を与え、カトリック改革という概念の創始者となったのがプロテスタントの史家マウレンブレヒャー (Wilhelm Maurenbrecher) である。彼は、1878年、79年にボン大学で「宗教改革時代史」について講義を行い、その研究成果を『カトリック改革の歴史 *Geschichte der katholischen Reformation*』(1880年)において書物として残している。その序文においてマウレンブレヒャーは、「反改革の根源は改革の最初の時期以前にまでわたり、その個々の萌芽はドイツのあの精神運動以前の世代に植えつけられていたことがわかった。福音派のあるいはプロテスタントの改革のほかはカトリック改革なるものを認めるべきである」⁵と述べている。

しかし、改革は新しい教会においてのみ可能だと考えたルター派の学者からは、カトリック改革という概念を用いることに対して激しい反対があった。また、カトリック史家のあいだでもその概念に対して否定的な見方もあったが、カトリックの教会史家パストール (Ludwig Freiherr von Pastor) によってカトリック改革の概念は一般化された。さらに、パストールが明らかにしたカトリック改革の経過叙述はプロテスタント史学者のあいだでも受け入れられてゆき、たとえばゲッツ (Walter Goetz) は、『プロピレーン世界史双書 *Propyläen-Weltgeschichte*』の第五巻 (1930) で、「改革に対する戦いに先立って教会の内的更新、カトリック改革があったのだから、反改革という言葉はこの時代の内容を説明するのに不十分である」⁶と述べている。そして、パストール以後の研究では、その改革の構造がより明確に分析されていった。そこで、次節では四期にわたるカトリック改革の構造を見てゆこう。

「カトリック改革」の構造

カトリック改革およびルターによる改革の両方において、アヴィニョンの教皇制(1309-77)および西方の大分裂(1378-1417)を通して生じた教会生活の悪弊がその背景にある。教皇がアヴィニョンにあってキリスト教社会を統治するには大きな財政的困難があった。こうした中、すでに俗化されていた聖職禄制は一層俗化され、教皇は免償符を販売し、聖職売買の風習に依存した。さらに、新しい聖職設定、教皇の特免権の範囲拡大、そして縁故関係による聖職任命などが行われたが、これらはいずれも財貨集中体制の一環であった。こうしてアヴィニョン時代に表面化した教会生活の悪弊は、分裂時代にさらに広まっていったのである。

さて、このような状況に陥った教会を改革しなければならないという声は、教皇のアヴィニョン移住二年後にフランスのヴィエンヌで開かれた会議においてすでにあがっていた。マンドの司教デュランが提出した意見書『公会議開催の方法と教会の墮落改革について *De modo concilii generalis celebrandi et corruptelis in Ecclesia reformandis*』は、「教会の頭と肢体の改革 *reformatio tam in capite, quam in membris*」を要求した⁷。「頭の改革」、すなわち教皇庁の改革についてこれほど明確なたちで改革要求を提出した会議はこれ以前にはなかったが、フランス王権との対立などの事情もあり、改革案の多くは実現には至らなかった。

こうして会議による改革が不成功に終わっていた間に、教皇や教皇庁といった頭からの改革ではなく、個々の地方の信徒、司祭、司教、修道者たちのあいだで生活の改革というかたちでの自己改革が起こっていた。このような下からの改革、すなわち「肢体の改革」は、14世紀末から発生し、15世紀には明確となった。これがカトリック改革のはじまり、すなわちカトリック改革第一期である。その一般的特徴は、「自己の内省、そこから出る使徒的活動、愛徳の実行」であった⁸。だが、このような第一期の改革は、個々の地方、教会の一部での断片的改革にとどまり、教会全体の流れとはならなかった。

続くカトリック改革の第二期は、「肢体の改革」の波が教皇庁に浸透し、改革が教皇の指導のもとに推進されはじめた時代であり、教皇パウルス三世の治世(1534-49)とともに始まった。ドイツではじまり、南欧にまで広がっていたルターの改革の影響は、教皇庁の指導による改革発展の動機ともなったが、その根本にはすでに第一期において起こっていた自己改革があった。したがって、第一期と第二期とのあいだには思想および人物の連続が見られる。たとえば、改革の第一期の1517年に、不在司教に対して在地義務を説くザクセンのルードルフ(Ludolf von Sachsen 1300頃-78頃)らが教皇に改革を要求して書いた『レオへの勧告書 *Libellus ad Leonem*』と、改革の第二期、1537年に教皇パウルス三世が九人の改革者をして提出させた『教会改革建議書 *Consilium de emendanda ecclesiae*』⁹とのあいだには親密な連関がある。また、カトリック改革第二期の1540年に、イグナチオ・デ・ロヨラがカトリック改革と世界宣教の主要な担い手となるベクイエズ会を設立したが、彼は改革の第一期に属するザクセンのルードルフの『キリスト伝 *Vita Christi*』の影響を受けて修道士となったのであった。

カトリック改革第二期における最も重要な出来事は、教皇パウルス三世によるトレント公会議の開催(1545)¹⁰と、会議の第一期(1545-47)、第二期(1551-52)における信仰教義教令の決定である。そしてカトリック改革の第三期は、プロテスタントの教説に対して自己の立場を明らかにした教会がトレント公会議の第二会期で示された教導、司牧の理想を第三会期(1561-63)で改革教令として具体化した時期である。さらに、トレント公会議の改革教令が教

皇の指導のもとに具体的措置で実施され、補足される時代がカトリック改革の第四期であり、この時期にグレゴリオ暦の制定(1582)やウルガタ聖書の改訂(1590、92)などが行われた。その期間は教皇ピウス四世(1559-65)の時代から教皇クレメンス八世(1592-1605)までと考えられるが、部分的には18世紀にまで及んでいる¹¹。

聖像画をめぐる教令

さて、カトリック改革の第三期において、プロテスタントの教説に対して自己の立場を明らかにした教会が、トレント公会議の第二会期に示したことを教令として具体化した例として、聖像画をめぐる教令について見てゆこう。

まずはその歴史的背景として、プロテスタントにおける改革運動の影響下で起こっていた出来事を確認しておく。宗教改革期、とりわけ1523年から25年にかけて、各地で聖像画が撤去され、破壊される事件、すなわち聖像画破壊運動(イコノクラスム)が起こっていた¹²。こうした破壊運動が起こったのは、ツヴィングリ主義が優勢であった地域が中心であった。宗教改革の指導者の一人ツヴィングリ(Huldrych Zwingli 1484-1531)によれば、「主は心の内にあり、聖像画はそれを乱すもの、全て否定されるべきもの」とされた¹³。そして、その論拠として、特にモーセの十戒——「あなたはいかなる像も造ってはならない」(出エジプト20:4)——が重視された。つまり、教会に飾られていた聖像画は、聖書において禁止されている偶像とみなされたのであった。一方、宗教改革のもう一方の代表的指導者であるルター(Martin Luther 1483-1546)は、基本的には聖像画を否定するが、聖像画そのものは重要な問題でないとする¹⁴。このため、ツヴィングリ主義が優勢であった地域では聖像画の撤去、破壊が徹底され、ルター主義圏ではむしろ民衆の伝統的イメージ、シンボルを流用したプロバガンダが進められたのであった。

他方、カトリック教会においては、プロテスタントが偶像として否定した聖像画は宣教のために積極的に用いられた¹⁵。プロテスタントの改革者たちが聖書と信仰のみによる合理的な神の理解を訴えたのに対し、カトリックは視覚イメージによって聖書の言葉をより近づきやすくし、理性よりも感情に訴えて信仰心を昇揚させようとしたのである¹⁶。トレント公会議が終結する1563年の第25総会で議決・公布された「聖人の取次ぎと崇敬、遺物、聖像画についての教令」では、信仰における聖像画の役割が以下のように確認された。

キリスト、聖母、諸聖人の聖像画を教会堂内に置き、それにふさわしい崇敬をささげるべきである。しかし、聖像画の中に神性または神の能力があるかのように表敬してはならない。過去の異邦人が偶像から期待したように、その聖像画から何かを求めたり、それに信頼したりしてはならない。聖像画に対する表敬は、それによって表わされた原型に向けられるものであり、聖像画に接吻し、その前で帽子を脱ぎ、ひざをつくのは、それを通してキリストを礼拝するのであり、キリストにならった聖人たちを崇敬するのである。このことは、聖像画破壊論者に対するこれまでの公会議、特に第2ニカイア公会議の教令によって教えられたことである。(傍点筆者)¹⁷

ここで示されているように、トレント公会議における聖像画をめぐる教令は、8世紀にビザンティン帝国で起こった聖像画破壊運動に対し、聖像画の崇敬について定めた第2ニカイア公会議(787)での決議を踏襲したものであった。ここで重要なのは、第2ニカイア公会議においても確認されたように、「聖像画への崇敬はそれによって表され

た原型に向けられるべき」として、「像」と「原型」とが明確に区別されている点である。それゆえ、「像」と「原型」とを同一視し、聖像画を偶像として否定する聖像画破壊主義の主張は退けられるのである¹⁸。

こうして、教皇庁およびカトリック改革を推進する修道会によって、聖像画は積極的に用いられてゆく。特にその改革の主翼を担ったイエズス会の宣教師によって、聖像画はアフリカ、インド、中国、中南米など世界中に伝播していった。日本においても、イエズス会の宣教師ザビエルによって1549年にキリスト教が伝来し、聖像画がもたらされた。ザビエル以後も宣教師たちは多くの聖像画を携行したが、長途の旅と保存上の便宜から大半が小型の銅板の油彩画であった¹⁹。

こうした招来の聖像画はすぐに需要に追いつかなくなり、日本人の画家によって盛んに模写されていった。1580（天正8）年、肥前有馬にセミナリヨと呼ばれる教育機関が設立されたが、ここではラテン語や西洋音楽と並び、油絵や銅版彫刻や印刷などが教えられていた。1583年にはイタリア出身でイエズス会士の画家ジョヴァンニ・ニコラオが来日し、日本人子弟に油絵、水彩画、そして銅版彫刻を教授している。東京国立博物館所蔵（長崎奉行所旧蔵品）の《三聖人像》（16世紀後期・17世紀初期、カンヴァス・油彩、154.0×100.0cm）は、招来品あるいはニコラオの作と言われている²⁰。この絵については、技法、構図、寸法を同じくする模写が残っており、これはニコラオに学んだ日本人子弟の制作になるものと考えられている。このように、当時の日本では、本格的な美術教育のもと優れた技術をもつ日本人子弟たちが育成されていたと推測される。実際、1565（永禄8）年のイエズス会士ルイス・デ・アルメイダ（Luís de Almeida 1525-83）の報告によれば、「大和宇陀の沢城内の小聖堂にキリスト復活の画像が掲げられたが、それは高山右近の父であるダリオが御用絵師に聖画を写させたもので、ヨーロッパの絵のように巧妙だった²¹という。

また、版画では、スペインのセビリア大聖堂の聖母子像の写しである銅版画《セビリアの聖母》（16世紀、紙・銅版、21.0×13.8cm）がセミナリヨで日本人子弟によって制作されたものと言われており、画面下部には「日本のセミナリヨにおいて、1597」と年記がある。セミナリヨで制作された聖像画の多くは禁教下に失われたが、《セビリアの聖母》は国外に持ち出されていたことで消失を免れ、現在まで残っている²²。

おわりに

聖像画の崇敬は、内的自発的刷新運動としてのカトリック改革のプロセスの中で明らかにされた正統的信仰教義の重要な要素の一つであった。そして、その改革の主翼を担ったイエズス会の宣教師によって、聖像画は世界中に伝播し、日本においても、キリスト教の伝来とともに聖像画がもたらされた。その後、イエズス会による教育制度のもと、優れた技術をもつ日本人子弟たちが育成され、多くの聖像画が制作された。

中世後期に個々の地方の信徒や修道者たちのあいだで始まった自己改革を源流とするカトリック改革は、やがて教皇指導の大きな運動となった。そして、その改革の流れの中で明らかにされた信仰のかたちは、イエズス会によってわが国にも伝わり、たしかにそこに根づこうとしていたのである。

- 3 竹村寛『キリシタン遺物の研究』開文社、1964年、p. 228。
- 4 キリストや聖母マリアを描いた「聖像画」については、「聖像画」と表記される場合もあるが、本稿においては「聖像画」とする。これに伴い、引用文において論述の都合上一部表記を変えたところもある。
- 5 澤田、前掲書、pp. 389-390。
- 6 上掲書、p. 392。
- 7 上掲書、pp. 397-398。
- 8 トリック改革第一期を代表する人物とその活動については、澤田、前掲書、pp. 400-402を参照。
- 9 『教会改革建議書 *Consilium de emendanda ecclesiae*』の邦訳は、『宗教改革著作集 第十三巻 カトリック改革』pp. 307-326に収録されている。
- 10 トレント公会議の教令集として、1567年にリヨンにおいて初版が刊行された『トリエント公会議の教令集』*Conciliorum Tridentinum, hoc est, canones et decretal sacreta oecumenici et generalis Concilij Tridentini*, Lovanii, 1567がある。トレント公会議の教令については、Heinrich Denzinger, Adolf Schönmetzer, *Enchiridion symbolorum, definitionum et declarationum de rebus fidei et morum*, 34. Aufl, 1967（H・デンツィンガー編、A・ジンマーマン監修『カトリック教会文書資料集』浜寛五郎訳、エンデルレ書店、1974年）に部分的に収録されている。公会議史については、H・イエディン『公会議史——ニカイアから第二ヴァティカンまで』南窓社、1986年を参照。トレント公会議の歴史的研究は、A・プロスベリ『トレント公会議——その歴史への手引き——』大西克典訳、知泉書館、2017年を参照。
- 11 なお、第四期の評価にあたって重要なのは条文の単なる実施ではなく、その実施の背後にあった精神あり、それを体現した人びと——ベラルミーノ（Robert Bellarmino 1542-1621）、十字架のヨハネ（Juan de la Cruz 1541-91）、そしてアヴィラのテレジア（Teresa de Jesus de Avila 1515-82）など——である。
- 12 16世紀の宗教改革期における聖像画破壊運動については、踊共二「チューリヒ宗教改革における聖像画破壊について」『西洋史学 146号』、1978年、渡邊伸「ハンス・バルツァング・グリーンと宗教改革——宗教改革時代の絵師とその周辺——」『長崎大学教養部紀要 30(1)』人文科学篇、1989年を参照。
- 13 渡邊、前掲書、pp. 14-15。
- 14 ルターによれば、旧約の戒律は新約以降キリスト者を拘束せず、新約において聖像画崇拝は禁じられているが、聖像画自体は禁じられていない。したがって、聖像画崇拝は聖人、ミサ等の問題の一環として攻撃されるが、それ自体は用い方によっては有益とし、むしろ聖像画破壊がもたらす災いの方が問題とされる（上掲書、p. 15）。
- 15 カトリック教会による聖像画の積極的活用動きをめぐる美術史的考察については、宮下規久朗『聖と俗——分断と架橋の美術史』岩波書店、2018年、pp. 11-17を参照。
- 16 上掲書、p. 11。
- 17 H・デンツィンガー、前掲書、p. 315。引用文において論述の都合上一部表記を変えたところもある。
- 18 8世紀ビザンティン帝国で起こった聖像画破壊運動とそれに対する聖像画擁護については、拙稿「イコン——受肉の神秘への眼差し」、『東方キリスト教との出会い——祈りのかたちとその拡がり——』西南学院大学博物館展覧会図録、インテックス、2018年、pp. 26-28を参照。
- 19 『東京国立博物館図版目録 キリシタン関連遺品篇』東京国立博物館編、2001年、p. 18。
- 20 『日本の美術 第144号 踏絵とロザリオ』至文堂、1978年、p. 7。
- 21 上掲書、p. 32。
- 22 1869年、《セビリアの聖母》は当時長崎の大浦天主堂に赴任していたプティジャン神父によってマニラで発見された。同じくセミナリヨで制作された銅版画《聖家族》とともにローマ教皇に献じられたが、これらは日本にとって貴重な資料であるとして下賜され、長崎に持ち帰られた。

1 カトリック改革の概念の成立史については、澤田昭夫「カトリック改革の概念と構造」『ヨーロッパ・キリスト教史』第3巻、中央出版社、1971年、pp. 387-410を参照。カトリック改革期における主な著作は、『宗教改革著作集 第十三巻 カトリック改革』澤田昭夫他訳、教文館、1994年に収録されている。

2 澤田昭夫「カトリック改革の概念と構造」『ヨーロッパ・キリスト教史』第3巻、p. 409。

2018 年度西南学院大学博物館企画展 II 「宗教改革と印刷革命」 出品目録一覧

資料名	英訳	制作年/制作地(出版社) /素材・制作技法	法量(cm)	原資料	所蔵	
第1章「古代・中世の聖書写本」						
1	リンディスファーン福音書 (複製)	Lindisfarne Gospels (Facsimile)	2002年/Facsimile Verlag/紙、宝石・貴金属 (レプリカ)	縦36.5×横30.5	710年頃/イギリス/羊皮紙、宝石・ 貴金属/大英図書館蔵	西南学院大学博物館
2	ヴァチカン写本(複製)	Codex Vaticanus (Facsimile)	1999年/Istituto Poligrafico e Zecca dello Stato/紙	縦29.5×横36.0	4世紀/制作地不詳(エジプト?)/ 羊皮紙/ヴァチカン教皇庁図書館蔵	西南学院大学博物館
3	アレppo写本(複製)	Aleppo Codex (Facsimile)	1975年/Eisenbrauns/ 紙	縦44.0×横35.0	930年頃/ティベリア/羊皮紙/ イスラエル博物館蔵	西南学院大学図書館
4	レニングラード写本(複製)	Codex Leningradus (Facsimile)	1998年/Brill Academic Publishing/紙	縦35.0×横30.0	1008-9年/カイロ/羊皮紙/ ロシア国立図書館蔵	西南学院大学図書館
5	貧者の聖書(複製)	Paupers' Bible (Facsimile)	1982年/Belser Verlag /紙	縦37.0×横28.0	1425-50年頃/制作地不詳(ハン ベルク?)/ 羊皮紙、手彩色/ヴァチカン教皇庁 図書館蔵	西南学院大学図書館
第2章「印刷革命」						
6	42行聖書(複製)	42-line Bible (Facsimile)	1978年/Idion Verlag/紙	縦47.0×横37.5	1455年頃/マインツ/羊皮紙、活 版、手彩色/国立プロイセン財団図 書館およびフルダ州立図書館蔵	西南学院大学博物館
7	ダンテ『神曲 煉獄篇』	Dante's Divine Comedy (Purgatory)	1491年/ヴェネツィア/ 紙、活版・木版	縦31.2×横20.6		西南学院大学博物館
8	聖ヒエロニムス 『マタイ福音書註解』	St. Jerome's Commentary on Matthew	1498年/ヴェネツィア/ 紙、活版・木版	縦34.0×横22.5		西南学院大学博物館
9	聖句註解付き ラテン語聖書	Latin Bible with Postil	1481年/ヴェネツィア/ 紙、活版、手彩色	縦31.0×横21.0		西南学院大学博物館
第3章「宗教改革と活版印刷聖書」						
10	ルター訳聖書 (1534年版・複製)	Luther Bible (Facsimile of 1534)	2003年/Taschen/紙/ 個人蔵	縦30.8×横19.7	1534年/ヴィッテンベルク/ 紙、活版・木版、手彩色	個人蔵
11	ルター訳聖書 (1763年版)	Luther Bible	1763年/ヴォルムス/紙、 活版・銅版	縦17.0×横11.2		西南学院大学博物館
12	ルター訳聖書 (1545年版・複製)	Luther Bible (Facsimile of 1545)	1967年/ Württembergische Bibelanstalt/紙	縦26.0×横18.5	1545年/ヴィッテンベルク/ 紙、活版・木版	西南学院大学図書館
13	ルターによる書簡と インッp寓話	Martin Luther: Letters and Aesop-Fable (Facsimile)	1983年/Belser Verlag/ 紙/個人蔵	縦33.5×横24.3	1516-32年/紙、直筆/ヴァチカン 教皇庁図書館蔵	個人蔵
14	チューリッヒ聖書	Zurich Bible	1531年/チューリッヒ/ 紙、活版	縦34.0×横17.0		西南学院大学博物館
15	ティンダル訳聖書(複製)	Tyndale Bible (Facsimile)	1976年/Paradine/紙	縦19.0×横17.0	1526年/ヴォルムス/紙、活版/ 大英図書館蔵	西南学院大学図書館
16	ジュネーヴ聖書(複製)	Geneva Bible (Facsimile)	1977年/講談社/紙	縦25.6×横18.6	1560年/ジュネーヴ/紙、活版	西南学院大学図書館
17	欽定訳聖書(複製)	King James Version (Facsimile)	1982年/南雲堂/紙 (First Facsimile Edition: 1911年/Oxford University Press)	縦44.0×横33.0	1611年/ロンドン/紙、活版	西南学院大学図書館
18	シクスト・クレメンティーナ 版ウルガタ聖書	Sixto-Clementine Vulgate	1892年/パリ/紙	縦18.2×横12.5		西南学院大学図書館 (波多野培根氏旧蔵)
19	バプスト賛美歌集 (複製)	Babst Hymnbook (Facsimile)	1988年/Bärenreiter Verlag/紙	縦16.0×横11.0	1545年/ライプツィヒ/紙、活版	西南学院大学博物館
補遺I「宗教改革500周年記念」						
20	ルターの宗教大改革	The Reformers	2017年/キリスト新聞 社・砂漠のキタキツネ/ ボードゲーム	縦22.5×横16.3 (外箱)		西南学院大学博物館

主要参考文献

単行書

【写本学】

Clemens, Raymond and Graham, Timothy. *Introduction to Manuscript Studies*, Ithaca/London, Cornell University Press, 2007.

De Hamel, Christopher. *A History of Illuminated Manuscripts*, 2nd ed., Phaidon Press, 1997.

———. *Making Medieval Manuscripts*, Oxford, Bodleian Library, 2018. (Previously published as *Scribes and Illuminators*, London, British Museum, 1992.)

Walther, Ingo F. and Wolf, Norbert. *Codices Illustres: The World's Most Famous Illuminated Manuscripts 400 to 1600*, Köln, Taschen, 2018.

クラウディア・プリンカー・フォン・デア・ハイデ『写本の文化誌——ヨーロッパ中世の文学とメディア』一条麻美子訳、白水社、2017年

ベルンハルト・ビショッフ『西洋写本学』佐藤彰一、瀬戸直彦共訳、岩波書店、2015年

【活版印刷】

Chartier, Roger ed., G. Cochrane, Lydia tr. *The Culture of Print: Power and the Use of Print in Early Modern Europe*, Cambridge, Polity Press, 1989.

Clair, Colin. *A History of European Printing*, London/New York, Academic Press, 1976.

Eisenstein, Elizabeth L. *The Printing Revolution in Early Modern Europe*, 2nd ed., Cambridge University Press, 2005. (E. L. アイゼンシュタイン『印刷革命』別宮貞徳監訳、小川昭子ほか訳、みすず書房、1987年(第1版からの翻訳))

Febvre, Lucien and Martin, Henri-Jean. *The Coming of the Book: Impact of Printing 1450-1800*, Verso ed., 1984.

アンドルー・ペディグリー『印刷という革命——ルネサンスの本と日常生活』桑木野幸司訳、白水社、2015年

E. P. ゴールドシュミット『ルネサンスの活字本——活字、挿絵、装飾についての三講演』高橋誠訳、国文社、2007年

M. マクルハーン『グーテンベルクの銀河系』森常治訳、みすず書房、1986年

【宗教改革・カトリック改革】

Olin, John C. *Catholic Reform: From Cardinal Ximenes to the Council of Trent 1495-1536*, New York, Fordham University Press, 1990.

A. E. マクグラス『プロテスタント思想文化史——16世紀から21世紀まで』佐藤文男訳、教文館、2009年

糸永寅一ほか監修『ヨーロッパ・キリスト教史 第3巻 中世後期』、中央出版社、1971年

金子晴男『ルターとその時代』玉川大学出版部、1985年

スタン・ナイト『西洋活字の歴史——グーテンベルクからウィリアム・モリスへ』高宮利行監修、安形麻理訳、慶應義塾大学出版会、2014年

F. W. グラーフ『プロテスタンティズム——その歴史と現状』野崎卓道訳、教文館、2008年

H・デンツィンガー編、A・ジンマーマン増補改訂『カトリック教会文書資料集』浜寛五郎訳、エンデルレ書店、1974年

徳善義和『マルティン・ルター——ことばに生きた改革者』岩波新書、2012年

ペーター・マンズ『宗教改革とルターの生涯』徳善義和訳、聖文舎、

1983年

H・イエディン『公会議史——ニカイアから第二ヴァティカンまで』南窓社、1986年

『宗教改革著作集 第十三巻 カトリック改革』澤田昭夫ほか訳、教文館、1994年

【聖書史】

De Hamel, Christopher. *The Book: A History of the Bible*, London, Phaidon, 2001.

Heffernan, Thomas J. and Burman, Thomas E. eds. *Scripture and Pluralism: Reading the Bible in the Religiously Plural Worlds of the Middle Ages and Renaissance*, Leiden/Boston, Brill, 2005.

Van Liere, Frans. *An Introduction to the Medieval Bible*, Cambridge University Press, 2014.

The New Cambridge History of the Bible, vol. 1-4, Cambridge University Press, 2012-16.

ウイレム・J・コーイマン『ルターと聖書』岸千年訳、聖文舎、1971年

展覧会図録

印刷博物館編『ヴァチカン教皇庁図書館展 書物の誕生——写本から印刷へ』凸版印刷株式会社 印刷博物館、2002年

印刷博物館編『ブランタン=モレトゥス博物館展 印刷革命がはじまった——グーテンベルクからブランタンへ』凸版印刷株式会社 印刷博物館、2005年

内島美奈子、山尾彩香編著『キリスト教の祈りと芸術——装飾写本から聖画像まで』西南学院大学博物館研究叢書、花乱社、2017年

その他

印刷博物誌編纂委員会『印刷博物誌 Artes Imprimendi』凸版印刷株式会社、2001年

大貫隆、宮本久雄ほか編『岩波キリスト教辞典』岩波書店、2002年
新カトリック大辞典編纂委員会『新カトリック大辞典』第1-4巻、研究社、1996-2009年

表紙図：ルター訳聖書（1763年版）

裏表紙図：木製手引き印刷機（画像提供：印刷博物館）

2018年度西南学院大学博物館企画展Ⅱ

宗教改革と印刷革命

編 集 下園 知弥 宮川 由衣 山尾 彩香

編集補助 西山 萌 鬼束 芽衣 中禮 尚史

発 行 西南学院大学博物館

〒814-8511 福岡市早良区西新3丁目13番1号

TEL 092-823-4785

発 行 日 2019年1月15日

印 刷 株式会社 インテックス福岡